

中野遺跡発掘調査概報

——四條畷市中野所在——

昭和62年3月

四條畷市教育委員会

は し が き

中野遺跡は国道163号線とJR片町線が交叉する地点を中心に、東西約500m南北約150m、四條畷市中野地域にひろがる古墳時代中期から平安～室町時代に至る複合遺跡である。今回の調査にかかる地点は、東の山地より西流する清滝川右岸、旧河内街道沿いに所在しており、中野遺跡全体の西端部に位置している。

発掘調査は、株式会社大和が倉庫の建設を施工されるのに先立って行ったもので、大阪府教育委員会文化財保護課のご指導とご協力のもとに実施、調査の期間は昭和61年8月より同年11月に至る約4ヶ月の期間であつた。

調査の結果、古墳時代中期より後期に至る遺構ならびに遺物を検出した。遺構としては、掘立柱建物跡、溝、井戸があり、遺物では手捏ねの土器をはじめ、双孔円板、滑石製白玉、ガラス製白玉等多数が出土した。また井戸からは鳥形の木製品が発見された。これらの事から、当遺跡は、古墳時代の祭祀に関する遺跡として、中野遺跡の全容解明に貴重な資料を提供することとなった。

調査に当っては、株式会社大和をはじめ佐藤建設株式会社その他関係各位のご協力を得た。ここに深く謝意を表する次第である。

四條畷市教育委員会

教育長 櫻 井 敬 夫

例 言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が昭和61年度に大阪市南区北炭屋町17番地株式会社大和 取締役社長 細井純一氏より委託を受けて実施した四條畷市中野本町474番地の1他3筆に所在する中野遺跡発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、昭和61年8月5日に着手し、昭和61年12月28日まで発掘調査を行い、昭和62年3月31日に調査事業を終了した。
3. 発掘調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師・松岡良憲を担当者とし、調査員として黒田 淳、調査補助員として児林真一・真弓 清・出口彰良があたった。
出土遺物の整理・実測などについては、泉 節子・北野富美子・貴志典子・粟栖直美・岡田圭子・田中和子・岸田夕起子・脇坂輝実・山田のぶ子・小野与子があたった。
4. 本書の執筆は、松岡良憲が行った。
5. 発掘調査の進行、報告書作成などについては、株式会社大和、株式会社小林得志建築事務所、株式会社佐藤建設、大阪経済法科大学、瀬川芳則、各位の御協力と御指導を得た。明記して厚く感謝の意を表したい。

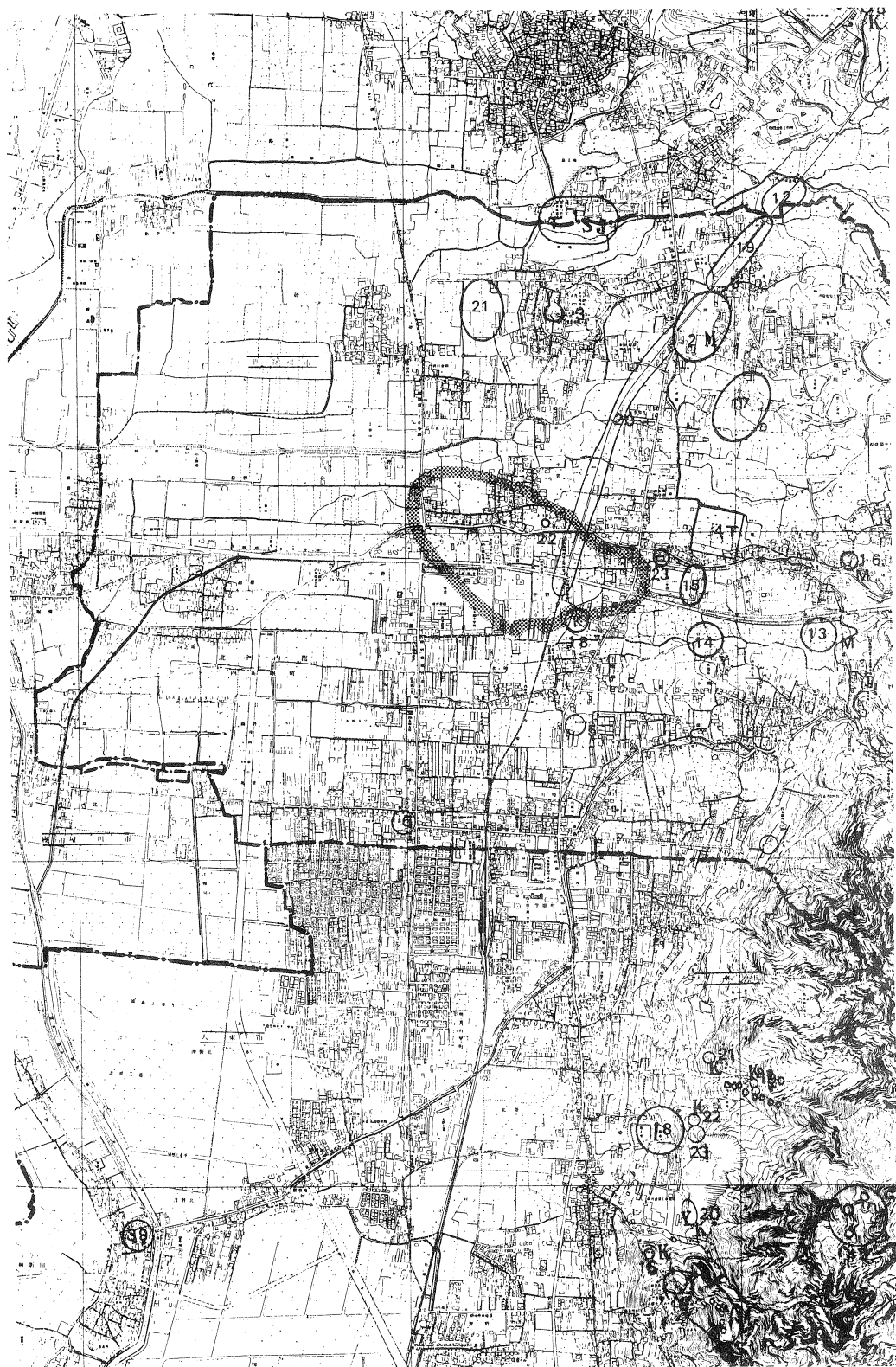


fig. 1 調査位置図 (地図)

第1章

はじめに

今回報告する調査成果は、株式会社大和の倉庫・配送センター建設に先行して実施したものである。調査区は、中野遺跡の範囲と考えられている西側端に近く、現在では住宅・工場等が密集している地域である。まず市教育委員会によるバック・ホウにての部分調査を86年4月2ヶ所に



fig. 2 トレンチ位置・地区割り・座標

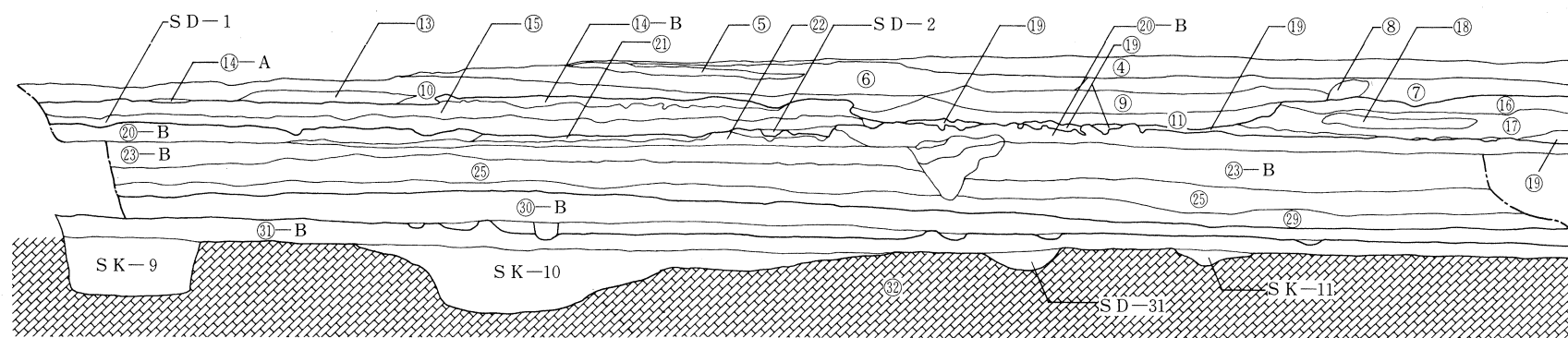
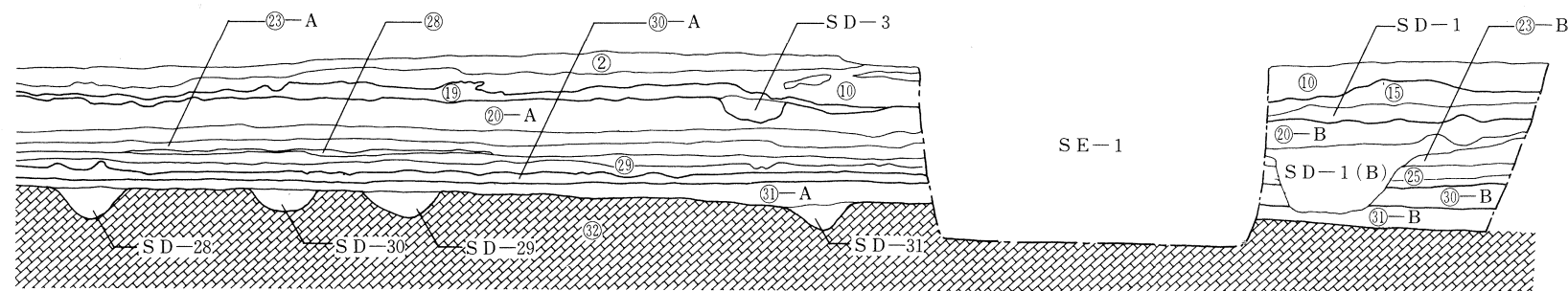
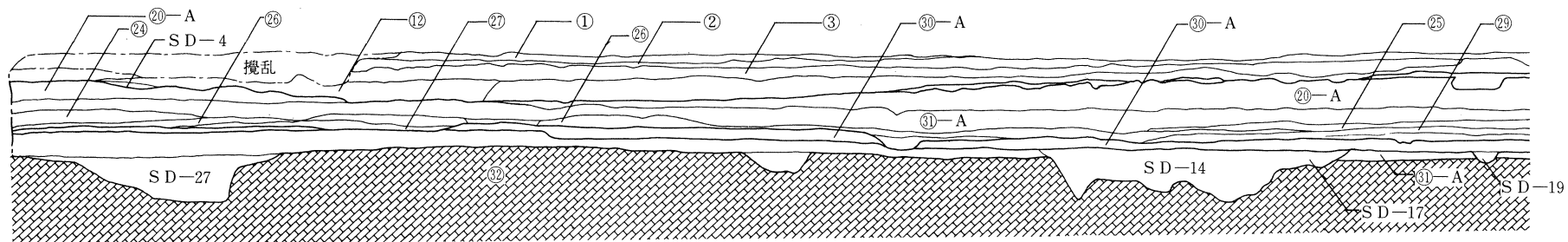
ついて実施したところ、多量の土器・滑石製品が出土し、建物部分については全面調査を実施することとなった。本調査は、86年8月より実施した。中野遺跡のまとまった調査としては第10次目となるものである。なお、本遺跡の“地理的・歴史的環境”については、既存の調査概報等で仔細に述べられており、本報告の項目からは除外させて頂く。

測量基準と地区割り

今後の調査への継続性を考慮し、調査の基準となる高さについては“T.P”を、平面座標は国土座標をそのまま使用した。しかし、南北方向に長軸をもつ長方形の調査区は、この長軸で示すと約7度東に振っており、遺物の取り上げ等に使用する地区割りにも国土座標を使用すると煩雑になるため、約10m四方の8区画に分割したものを別に設定した。

土層堆積と遺構面

中野遺跡は、生駒山地の東麓でも山裾の遺跡であるため、扇状地頂上付近の立地と考えられがちである。しかし、調査地付近は、現地表面の標高がT.P 9 m程度と低く、実際は平野部が山地に迫った比較的低い土地である。fig. 3 に示す土層の堆積が粘土及びシルトを主体とし



- | | | |
|--|--|--|
| ① オリーブ黒色粘質土 (5 Y $\frac{1}{2}$) | ⑭-A オリーブ灰色シルト (2.5 G Y $\frac{1}{2}$) | ⑳ オリーブ黒色砂混り粘質土 (10 Y $\frac{1}{2}$) |
| ② 黒褐色砂混り粘質土 (2~3mm砂粒) (2.5 Y $\frac{1}{2}$) | ⑭-B 緑灰色シルト (10 G $\frac{1}{2}$) | ㉑ オリーブ灰色砂混り粘質土 (2.5 G Y $\frac{1}{2}$) |
| ③ 灰オリーブ砂混粘質土 (5 Y $\frac{1}{2}$) | ⑮ 灰色粘質土 (5 Y $\frac{1}{2}$) | ㉒ 暗オリーブ灰色砂混り粘質土 (2.5 G Y $\frac{1}{2}$) |
| ④ 明黄褐色粗砂 (1~5cm石稜) (10 Y R $\frac{1}{2}$) | ⑯ 黄褐色微砂 (2.5 Y $\frac{1}{2}$) | ㉓ 灰色砂混り粘質土 (7.5 Y $\frac{1}{2}$) |
| ⑤ 明黄褐色細砂 (2mm~2cm砂・石稜) (10 Y R%) | ⑰ オリーブ黄色微砂 (5 Y $\frac{1}{2}$) | ㉔ 緑黒色砂混り粘質土 (10 G $\frac{1}{2}$) |
| ⑥ オリーブシルト (5 Y $\frac{1}{2}$) | ⑱ 赤灰色粗砂 (2~5cm石稜) (5 Y R $\frac{1}{2}$) | ㉕ 灰色砂混り粘質土 (N $\frac{1}{2}$) |
| ⑦ 明黄褐色細砂 (10 Y R%) | ⑲ 緑灰色シルト (10 G $\frac{1}{2}$) | ㉖-A 暗緑灰色砂混り粘質土 (10 G Y $\frac{1}{2}$) |
| ⑧ 明黄褐色シルト (10 Y R $\frac{1}{2}$) | ㉒-A 灰色粘質土 (10 Y $\frac{1}{2}$) | ㉖-B 暗オリーブ灰色砂混り粘質土 (2.5 G Y $\frac{1}{2}$) |
| ⑨ 明褐色粗砂 (7.5 Y R $\frac{1}{2}$) | ㉒-B オリーブ黒色シルト混り粘質土 (10 Y $\frac{1}{2}$) | ㉗-A 黒褐色砂混り粘質土 (5 Y R $\frac{1}{2}$) |
| ⑩ にぶい黄色細砂 (2.5 Y $\frac{1}{2}$) | ㉓ オリーブ灰色粗砂 (5 G Y $\frac{1}{2}$) | ㉗-B オリーブ黒色砂混り粘質土 (7.5 Y $\frac{1}{2}$) |
| ⑪ オリーブ黄色細砂 (5~10cm石稜) (5 Y $\frac{1}{2}$) | ㉔ 暗緑灰色シルト (7.5 G Y $\frac{1}{2}$) | ㉘ オリーブ黒色砂混り粘質土 (5 Y $\frac{1}{2}$) |
| ⑬ オリーブ黒色粘質土 (10 Y $\frac{1}{2}$) | ㉕-A 灰オリーブ砂混り粘質土 (5 Y $\frac{1}{2}$) | |
| ⑬ オリーブ灰色砂混りシルト (7.5 Y $\frac{1}{2}$) | ㉕-B 灰色粘質シルト (7.5 Y $\frac{1}{2}$) | |

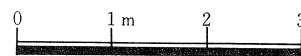


fig. 3 土層断面図

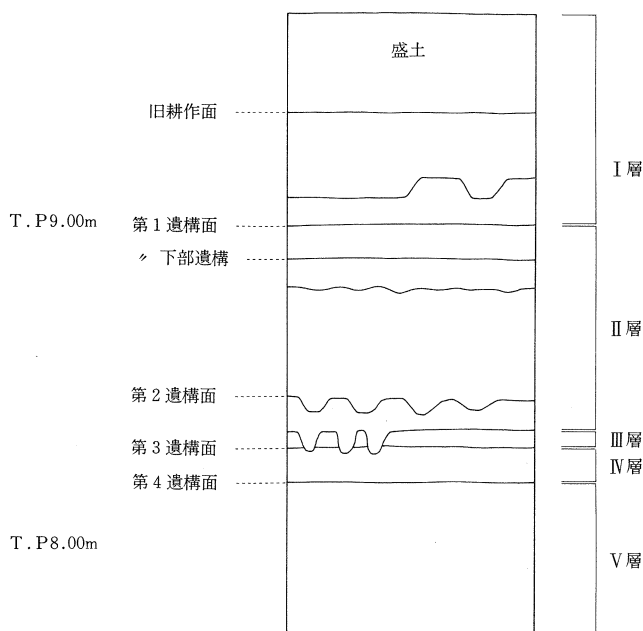


fig. 4 基本層序

た水平堆積であり、扇状地の特徴である礫や粗砂の堆積を含まないことから、一見して河内平野の他の低地性遺跡のそれと比べて大差ないと云える。

このような堆積状況のため、土層の把握は比較的容易である。ここではそれをさらに明確にするため、堆積時期に留意した基本層序を設定し、今回の調査区での土層堆積を概観する。

基本層序 I 層

①～⑬層を総称している。①～③層とした粘質土層は、旧耕作土及びその床土にあたる。④～⑪・⑫層とした砂及びシルトは山間部を流れる中小河川の氾濫によるものであろう。⑫層とした粘質土は、前述の氾濫のあとに堆積したものと考えられる。時期的には、近・現代の期間に該当すると考えている。

基本層序 II 層

⑭～⑲層を総称している。⑯～⑲及び⑳の各層は、何れも砂の堆積であり、明確な氾濫の痕跡である。この層以外の堆積も、シルトと粘質土の互層状になっており、氾濫の繰り返しの結果と考えられる。以上の堆積については、遺物の出土量が少なく明確な推定ではないが、中・近世と考えている。

基本層序 III 層

㉑層とした黒っぽい粘質土である。堆積の厚さは最大でも30cm強で、平均的には15cm程度である。この層は、今回の調査で最も豊富な遺物を包含していた。出土した遺物は当然ながら土器類が大半であるが、時期的には5世紀後半から6世紀中頃に相当し、以降のものを含まないことから、同層の堆積時期を古墳時代と考えている。III層に相当するのがこの層だけであり、

奈良時代以降古代に相当する堆積が認められないのは、上層で認められた幾度もの河川の氾濫による堆積層の流失が激しかったものと理解している。

基本層序Ⅳ層

⑳層とした黒っぽい粘質土である。遺物はほとんど認められず、若干出土したものについても、遺物の示す時期及び出土状況から、上層からの沈み込みと考えている。従って堆積時期は不明であるが、上層からの出土遺物の中に弥生時代以前のものが若干認められるため、古くなる可能性を考えている。

基本層序Ⅴ層

㉑層とした黄色っぽい粘質土で、所謂、地山と考えている。しかし、調査の最終段階で土層観察用の深掘りトレンチを掘削調査したところ、この層も幾層にも分層でき、各段階で、中小河川の跡を検出している。

第2章

1. 遺構・遺物

第1遺構面

基本層序Ⅱ層最上位の㉒-B層の上面が、ベースとなっており、調査区の南側で大型溝を検出している。この溝の南北両側には、平行、或いは、直交する小溝群が整然と並ぶかたちで拡がっており、畑とその灌漑用水路と考えられる遺構群である。また、この面の直上及び直下で検出した井戸等の遺構については、時期・性格などの類似性から同遺構面との直接的な継続性が考えられ、上・下層遺構として扱っている。

大型溝 (SD-1 (A)・
(B))

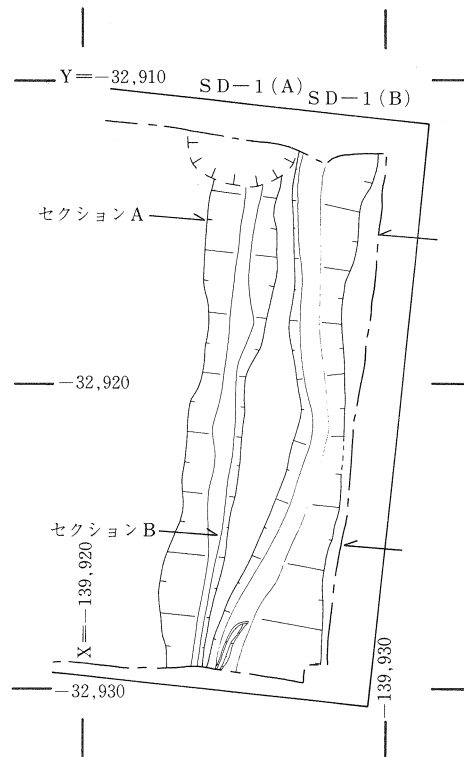


fig. 5 SD-1 平面

調査区
の南端付
近で検出
した東西
方向の溝
である。
東側は、
後述する
井戸（S
E-1）
によって
切られて
いる。断
面図でも
明確なよ
うに、こ
の溝は大

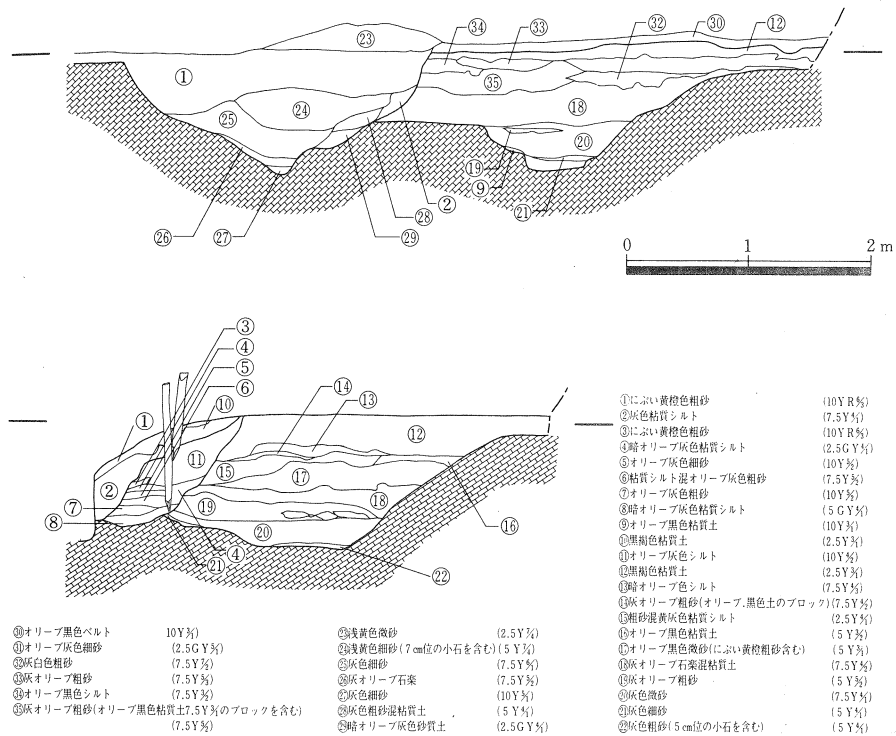


fig. 6 SD-1 断面図

きく2つの流路を形成しており、その切り合い関係からより新しい段階のものをSD-1 (A)、古い段階のものをSD-1 (B) と呼称した。まずSD-1 (B) の遺構であるが、この溝は平面図から判るように、やや蛇行気味に流路を形成しており、人工的なものではなく、小河川であった可能性も考えられる。下位及び上位の堆積は、砂及びシルトで、中位の堆積は粘質土であり、時期によって水の流れ方にも差異を認める。⑫層とした粘土はSD-1 (B) とSD-1 (A) とに時間的隔絶があったことを示唆している。SD-1 (A) は第1遺構面に対応するものである。SD-1 (B) の流路をやや北へ平行移動した形で開削し、部分的に杭を打ち護岸としたものと理解しており、人工と云えるものである。③～⑧・⑪層は、その護岸の盛土と考えている。共に量的には多くはないが、陶磁器・土器・瓦などの遺物が出土しており年代も推定可能である。

小溝群 (SD-2 ~13)

前述のSD-1 とほぼ平行或いは直交する幅約0.5~0.8mほどの溝である。SD-2・3はSD-1 と2~3mの間隔で平行した、東西方向の溝である。SD-4~13は、それぞれが1~2mの間隔で平行して南北に延びる溝で、SD-6以外は、SD-3に接続して終る。SD-9~13は、後の攪乱によりトレンチ北寄りですて切れてはいるが、本来は、さらに北へ延びていたと考えている。SD-2も東端が途切れてはいるが、これも後の攪乱によるもので、やは

り東へと延びていたと思われる。この溝はSD-3と比べて、削平を受けていることを考慮してもやや小さいもので、接続する南北方向の溝が認められないことから、性格的には、SD-4~13と同じもので、小溝群のセット関係が、SD-1を境として南と北では、異なっていると考えられる。溝内の堆積土は、SD-1(B)と同様の砂及びシルトである。遺物は小片が出土ただけで、器形の判明するものは認められなかった。

第2遺構面

基本層序Ⅲ層とした③0-A・B層上面をベースとしている。遺構的には、前項で報告した畑跡と同様で、直交する小溝群で構成されるもので、遺存状況が、第1遺構面のそれに比べて非常に悪い。検出したのは、写真で示したよう、ほぼ南北と東西の2方向の溝で、検出状況は疎らであるが、本来は、第1遺構面同様の畑が整然と営まれていたものと考えられる。溝の埋土は砂混じりの土及びシルトで、この埋土の異なりは、時間的な差と考えている。遺物は認められなかった。

第3遺構面

基本層序Ⅳ層とした③1-A・B層上面をベースとしている。微地形的には、調査区の北東から南西へ緩やかに下がる傾斜を示し、平坦なものではない。検出した遺構は、掘立柱建物群・竪穴状建物・溝・土壇・井戸等、量・内容共に今回の調査中、もっとも豊富である。遺物も、溝・井戸等の遺構中心に、豊富に出土しており、個々の遺構を理解する上で非常に有利となっている。

大型溝 (SD-14)

調査区中央よりやや北寄りの位置に南東から北西方向に延びる形で検出した。断面図からも明確なように大きく3期の流路の変化が認められ、南側の古い段階のものから順にSD-14(A)・(B)・(C)と呼称する。SD-14(A)は、SD14-(B)によって切られており、調査区東側に6mほどの延長で検出できただけである。従って溝の土層断面観察では、セクションBで認められるが、セクションAでは、認められない。この断面観察から推定される溝幅は、約2.5mで、僅かに二段掘りの形式を呈する。溝内最下層が、唯一砂の堆積で、この時点では、明確な流れがあったこ

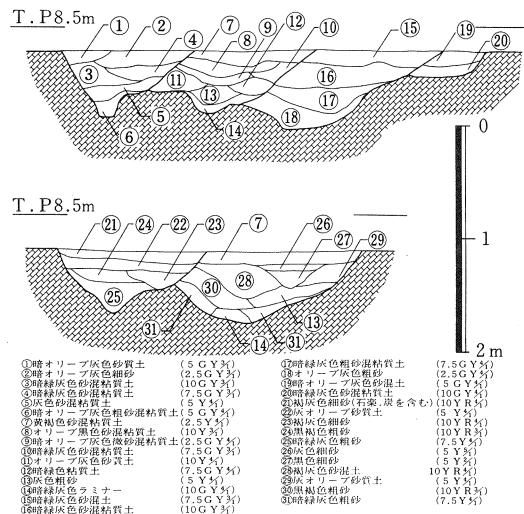


fig. 7 SD-14断面図

とを示唆している。次にSD-14 (B)は、中央部分で折れ曲がり、逆“く”の字状を呈する形で検出した。横断面形は、東側で二段掘りに近い形状を呈し、中央部より西側では、大きく開いて半円形に近いU字形を呈す。溝幅は、1.7~1.8m程度であると推定している。この二段掘り状を呈する部分は、溝底も階段状に開削されており、上段と下段に分けられる。この下段には、板材を組合せた木樋が設けられ、遺存していた。樋は、全長・2.2m幅・0.3mの規模で角材状の木2本を側とし、側の突っ張りとして自然木を2本の間を渡している。天板は、約1.5mの板材を使用し、不足分0.7mについては、板材製作時の残片のような木材で埋めている。溝内の堆積土は、最下層ではないが、下位に砂層を含んでおり、最下層の堆積は木樋の影響によるものと考え、(A)同様、開削直後に明確な流れがあったことを認める。調査では、確認し得なかったが、木樋の存在から、この部分に土盛りによる陸橋を設けていたものと考えている。SD-14 (C)は、最も新しい段階のもので、やや南西にふくらんだ形で検出した。横断面形は、東側セクションBによると、南肩は2段掘り状、北肩は直線的な形状を呈し、底は平坦である。セクションAでは、これが、丸味を帯びて崩れた状態を呈する。溝幅は、1.2~1.3mを測る。溝内堆積は、下位の堆積が全て砂層で、(A)・(B)と比較して流れがあり、機能した時間が長いと理解している。遺物が最下層に埋没する状態で、東側部分に集中して出土している。

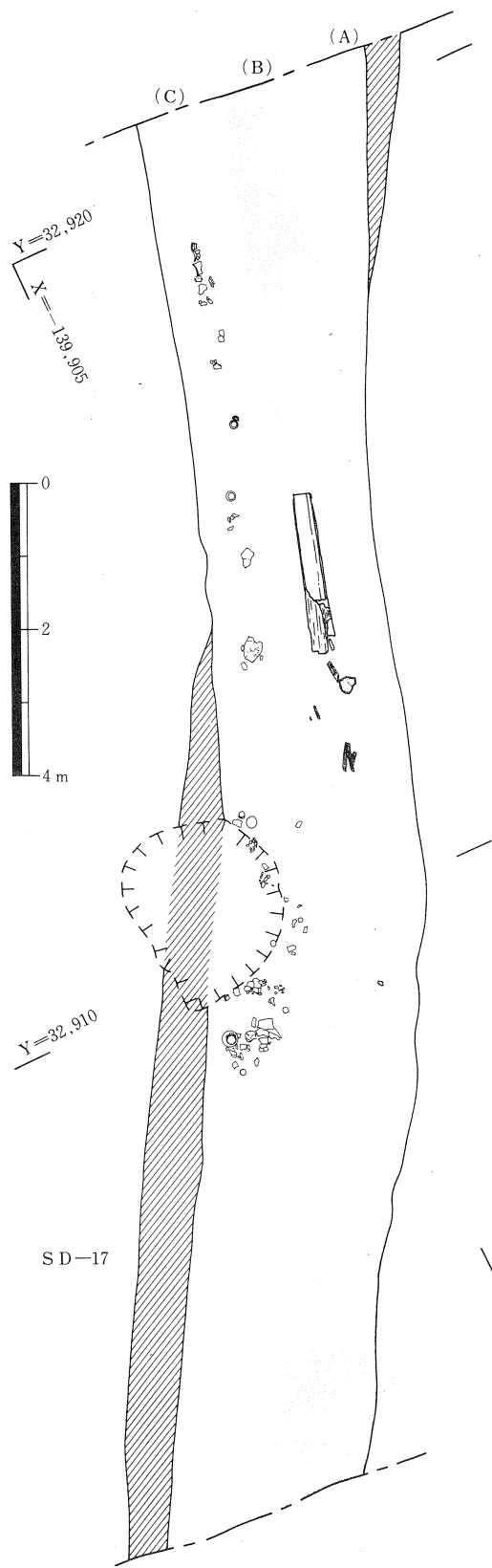
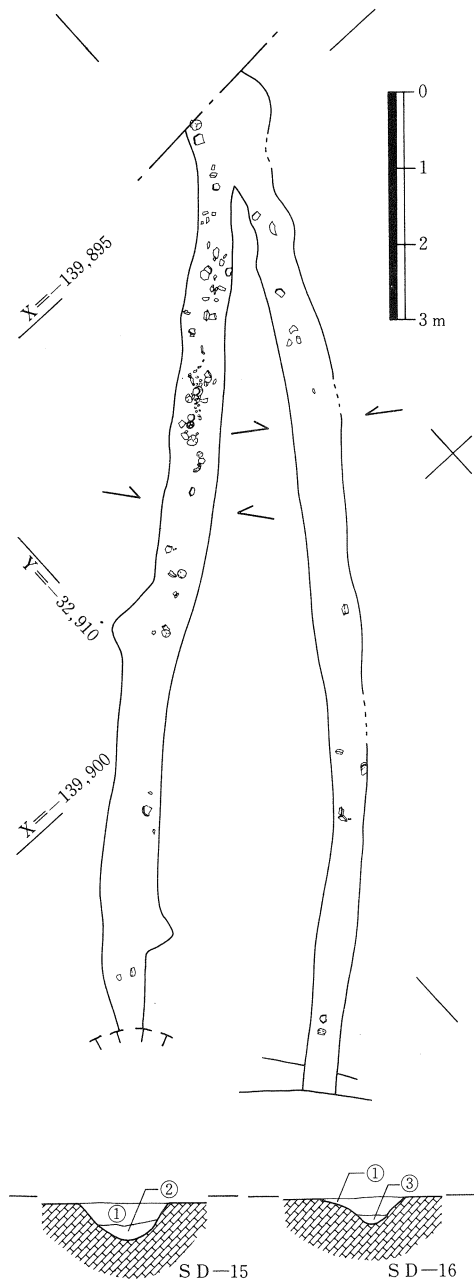


fig. 8 SD-14平面・遺物出土図

中形溝 (SD-15・16)

調査区北東部分の微地形的には、最高所である T.P.8.5m 付近では、幅約 1.1m の 1 条の溝であるが、南西に延びるに従い幅約 0.6~0.7m の 2 条の溝に分離し、後述する土坑 SK-2 を挟む様に弯曲した形状で検出した溝である。その南西端は、共に 2 区で SD-14 に切られており、その南側では検出していない。溝内の堆積土は粘質土であり、2 層に分層できるものであるが、遺物は、この分層に関係なく、比較的豊富な量が出土した。特に SD-15 北東部分での土器出土状況は、土器の一括廃棄を考えさせる状態であり、下層から上層を越えて、一部で溝肩よりも高いレベルまで土器が遺存していた。下層の粘土には、SD-15・16 共に、粗砂や砂が混じっており、開削初期には水の流れがあったことを示唆してはいるが、恐らくは短期間であったと考えている。むしろこの溝の機能としては水を流すこと以外にあり、土器の廃棄により、人為的に廃絶させられたものと理解している。



- ① 黒褐色石炭混粘質土(2.5Y 2/2)
- ② 黒褐色粗砂混粘質土(10Y R 2/2)
- ③ 黒褐色砂混粘質土(2.5Y 2/2)

fig. 9 SD-15・16 平面・断面・遺物出土図 央北寄り部分で、検出した南東-北東方向の溝で、SD-14 とほぼ近い流路で検出した。幅は 0.5~0.6m とほぼ前述の SD-15・16 と同型であり、これとほぼ直交する溝である。2 区で、SD-

中型溝 (SD-17)

調査区の中

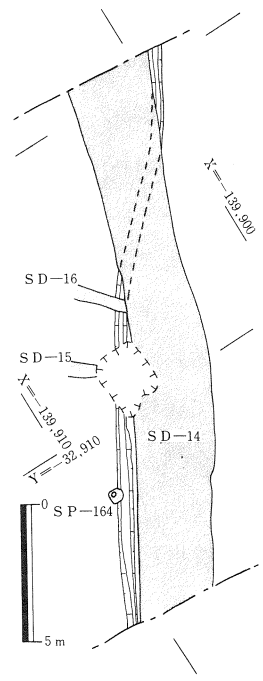


fig. 10 SD-17 平面図

14により、約20°の角度に交差した状況で切られているが、南北両側で遺構を確認しており、さらに調査区外へ延びるものである。SD-15との直接の切り合いは関係は、市教委の試掘ピットにかかっており判断できないが、SD-16との関係は、かろうじてSD-16に切られる状態で遺存している。また後述する柵よりもSP-164に切られていることからして古い段階のものである。

中型溝 (SD-18・19)

調査区中央部、SD-14の南側に平行する形で検出した幅0.5~1.1m程の南東-北西方向の溝である。6区から2区へSD-14と平行して延び、3区で円弧状の流路をもつのがSD-18で、この直線状から円弧状に変化する地点から、延長線状に延びる部分の延長4mほどをSD-19とした。溝内の堆積土は砂混じりの粘質土で一気に埋没したと考えられる。遺物は、2条の溝の合流点付近で甕が1点、口縁部を欠くだけのほぼ完形で出土しており、SD-15・16ほどではないが、SD-17よりは、多い量の土器類が出土した。遺構の切り合い関係としては、後述するSB-2を構成する3箇所の柱穴を、溝の開削により切っており、この建物より後出するものと理解している。

中型溝 (SD-20) 小型溝 (SD-21・22)

調査区中央部西寄りの6・7区で検出した溝群である。幅0.8~2mを測る。溝SD-20は前述のSD-18と同様に円弧状から直線的に延び、あたかもSD-18を拡大した様な流路を示す。この溝にそって、幅0.3~0.6mの溝SD-21及び22があり、その流路の形状からして、この2条の溝は、SD-20に付属したものと考えている。検出中央付近が井戸・SE-2で切られた状

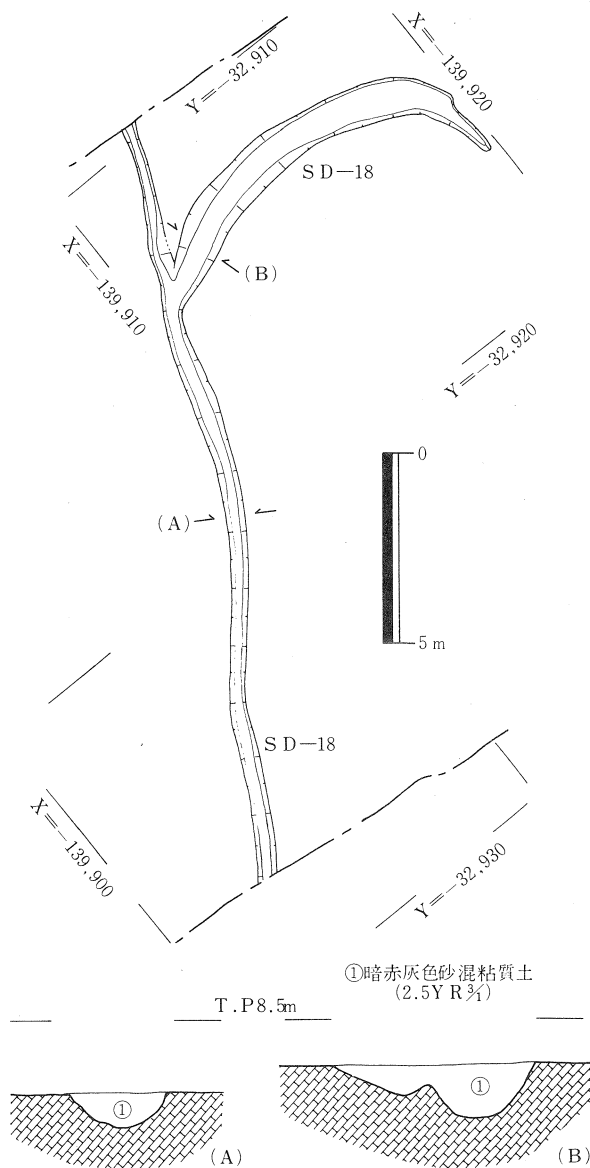


fig. 11 SD-18・19平面・断面図

況であるが、遺物の出土状況及び最終埋没状況から推定して、溝群廃絶後とは考えにくく、むしろ、機能中にSE-2を開削し、共に廃絶したものと考えている。遺物は、SD-20から若干量出土しており、SD-21・22からは、ほとんど出土していない。

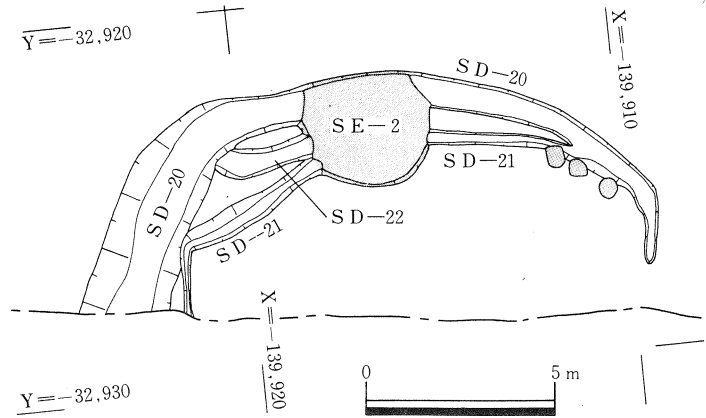


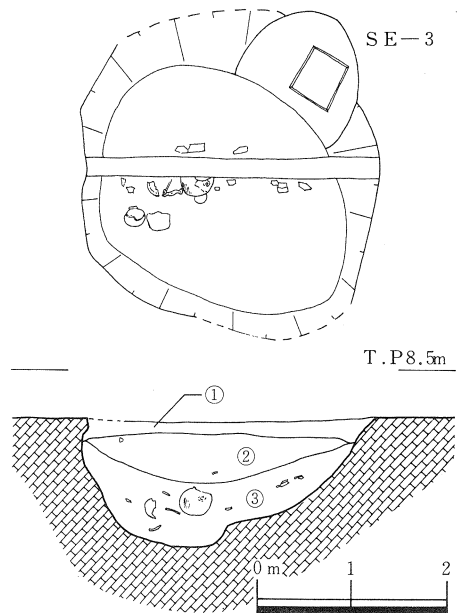
fig.12 SD-20・SE-2平面図

井戸 (SE-2)

前述したSD-20・21を切る状態で検出した径3~3.4mの井戸である。最下部が、径1.1mで0.2~0.3mほど深く2段になっている。調査中においても、この深くなった部分は常に水が溜っている状態であった。井戸内の土層堆積は、3層に分層でき、遺物の大半は、最下層の③層より出土している。その中でも注目すべきものとして鳥形木製品の出土があるが、これは③層の特に完形或いは、それに近い状態の土器が集中する部分から出土しており、②・③層から出土した、数多くの破片となった土器類とは、その意味で区別されるものである。他には、大量の桃の種子が出土しており、取り上げに成功した量でもかなりのもので、取り上げられないほどに腐食したものもかなり認められた。①層は、ほとんど遺物が認められない堆積で、SD-20~22の溝内の堆積土とも似るものである。

井戸 (SE-3)

SE-2の①層を除去した時点では、この井戸の掘り方北東部分で、堆積土が非常に軟弱であることを感じた程度であった。さらに②層を除去する時点で、径1.2~1.3mの掘り方を検出している。この検出した時点で確認した切り合い関係は、明らかにSE-2により切られているものであった。この井戸は、掘り方内に、4枚の板材を組み合わせた井戸枠が遺存しており、この掘り方内の枠外の空間は、粘土ブロックを含む砂混じりの粘質土で埋め還されている。深さは上部が失われているが推定1m程度のもので、



- ①オリーブ黒色砂質土(7.5Y%)
- ②オリーブ黒色砂混土(7.5Y%)
- ③黒色粘土(2.5GY%)

fig.13 SE-2断面図

掘り方の到達層位で水が得られるものでないことから、“溜め井戸”的な機能が考えられる。従って、SE-2との関係を整理すると、開削は、SE-2に先行あるいは、同時に推定でき、SE-2で得た水を溜める機能を考え、この2つの井戸が1組になって使用されていたものと理解している。そして、廃絶は、ほぼ同時と推察している。遺物としては、井戸枠内より、木片、小枝片と共に、凹石が1点のみ出土した。

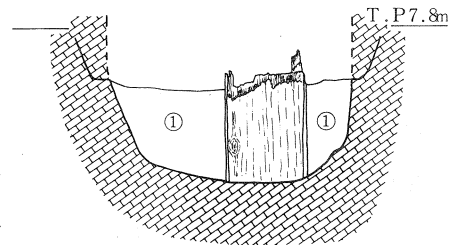
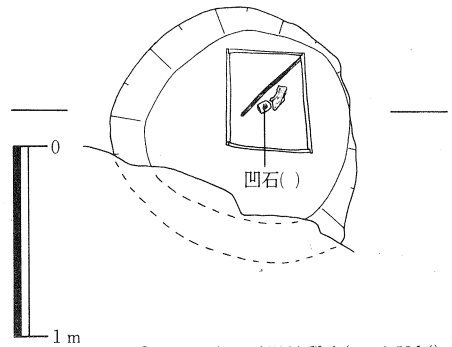


fig.14 SE-3 平面・断面図

掘立柱建物 (SB-1)

調査区北側で検出した、2間×2間、総柱の建物である。建物を構成する柱穴は、掘り方が最大0.8×0.6m (SP-20)、最小でも0.55×0.45m (SP-21)と古墳時代としては、立派なものである。柱は、SP-19で柱根が遺存しており、それから推定すると、13cm前後

の径の丸太材であると推定される。10㎡程度の建物としては、かなり、頑強な構造と考えられる。建物の廃絶に際して柱は、SP-19では、その柱根が遺存していたが、他の柱穴では、柱痕が、

かなり乱れており、抜き取っている可能性が高い。遺物としては、柱穴の掘り方内から土器小片に混じって滑石製白玉が9ヶ所全ての柱穴から出土している。

掘立柱建物 (SB-2)

調査区中央東寄りで、前述したSD-18に切られた状態で検出した建物である。建物の規模は、2間×2間の総柱で、面積は約10㎡、柱の掘り方は最大のSP-176で、0.75×0.5m、最小はSP-49の0.45×0.3mであり、前述のSB-1とはほぼ同じ規模の建物と推定できる。建物北東隅の柱穴内に、直径15cmの柱根が遺存しており、これから建物の規模がSB-1と同様程度と推定できる。建物廃絶後の柱は、SB-1でも1ヶ所遺存していたが、他は抜き取っていると推定した様に、SB-2においても同様の推定をしている。遺物

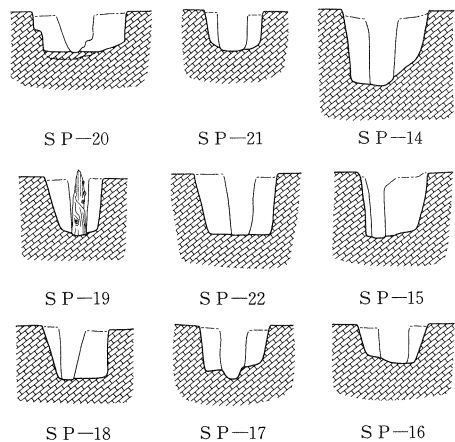
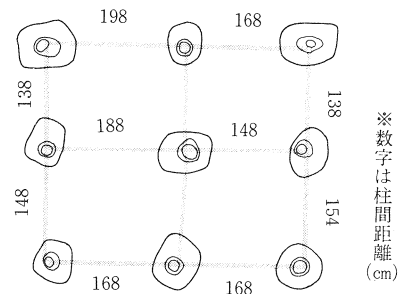


fig.15 SB-1 平面・断面図

は、SP-48から須恵器坏蓋が、約1/2の大きさで出土している。他に建物の柱穴SP-53から滑石製白玉が1点出土している。

掘立柱建物 (SB-3)

調査区南西部で検出した2間×2間の建物で、面積は約16㎡とSB-1・2より一回り大きく、柱は建物の外周のみの8本である。柱の掘り方は、最大はSP-67の0.8×0.6m、最小SP-69の0.45×0.45mで、他のものとはほぼ同じ大きさである。柱は、この建物でもSP-70において、検出した柱痕より、やや異なる位置から直径10cm程の柱根様の丸太材を検出した他は、遺存していなかった。この建物についても廃絶後、柱を抜き取って

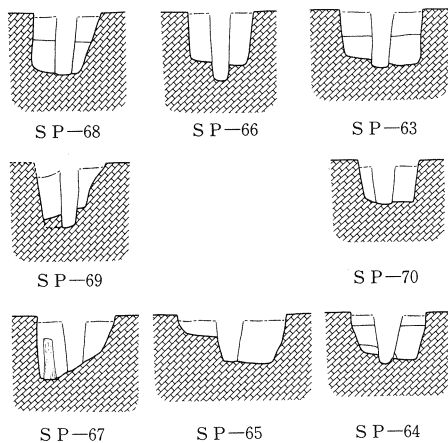
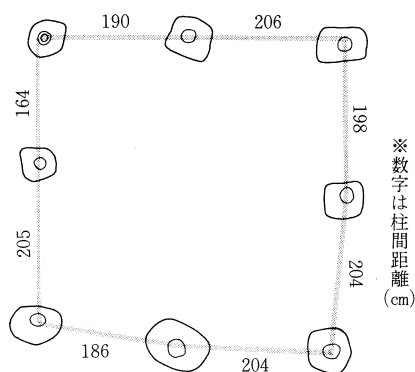


fig. 17 SB-3平面・断面図

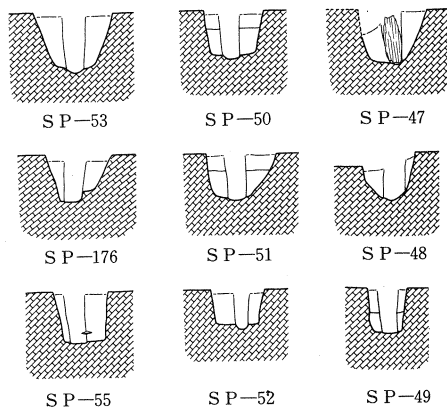
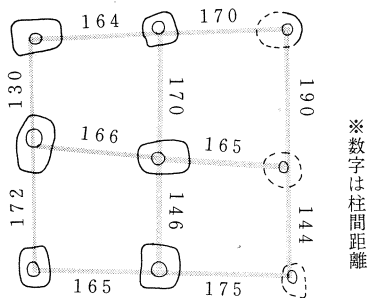


fig. 16 SB-2平面・断面図

いる
と考
える
のが

妥当であろう。遺物はほとんど認められなかったが、建物の柱穴SP-70から滑石製白玉が出土している。

掘立柱建物 (SB-4)

調査区中央部西側で、SB-3の北側に検出した一辺2間の建物である建物の西側は調査区外に延びるため不明である。柱の掘り方は、最大がSP-172の0.6×0.5m、最小がSP-166の0.5×0.4mと他の掘立柱建物と同様の大きさである。建物の検出した東側の一辺は3.85mで、SB-1・2よりも15~20%ほど大型で、柱も建物の外周のみにあることなど規模、形状からSB-3に似た建物と考えている。遺物は、土器の小片以外は、検出されず、建物の柱穴SP-167から滑石製白玉が出土している。

竪穴様建物 (SB-5~7)

調査区南側で検出した重複する遺構で、SB-5がSB-6・7に切られている状態で検出した。下位にあたるSB-5は直径7~7.5mの不整な円形の溝をもち、後の土層断面の観察によると10cmほど内側で貼り床状の層が認められる。この溝に伴う柱穴としては、SP-151・156・159を考えている。この柱配置で復原すると柱間2~2.5mで溝の内側に沿って6本の柱が六角形に配置される建物が推定される。上位のSB-6・7は間隔が狭く2棟で一組の如き配置を示す。東側のSB-6は、径6.5m程の隅丸方形に近い形状で溝が周る。SP-153・158が支柱穴と考えており、4本柱の平面形が推定できる。溝の内側は、SB-5の場合とは異なり、貼り床状の施設は認められない。西側にあるSB-7は径2m程のはぼ円形に周る溝を有する。支柱と考えられるものは、SP-160 1ヶ所のみである。この2棟の建物に付属して、SD-26がSB-6の溝からSB-7を避ける様に延びており、排水施設と考えている。

柵跡1 (SA-1)

調査区北側にある掘立柱建物SB-1の北辺に約1.9mの間隔で平行する、東西方向で長さ3間の短いものである。同

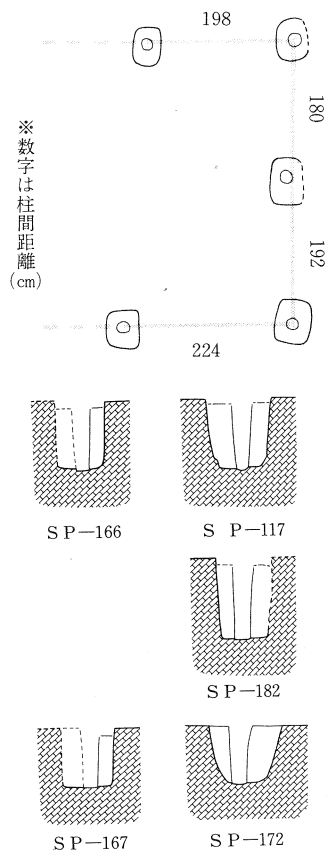


fig. 18 SB-4平面・断面図

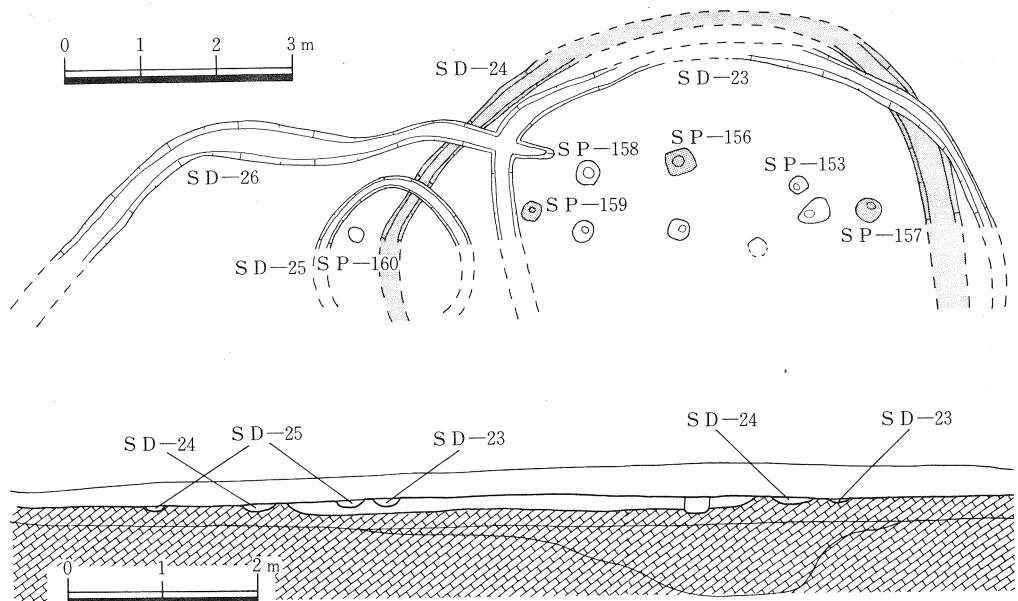
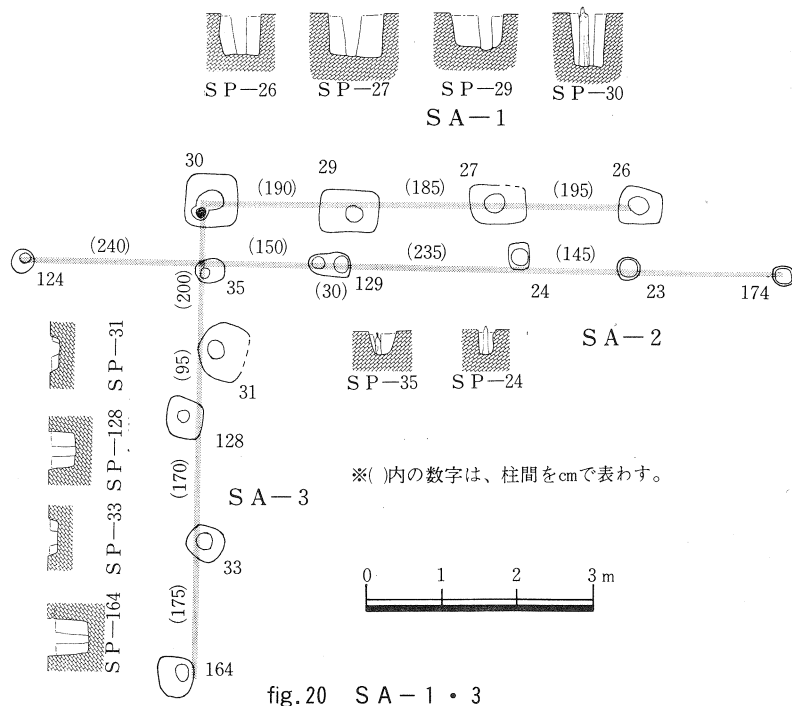


fig. 19 SB-5~7平面・断面図

柵跡の東端はこれも
 又SB-1の東辺に
 合致しており、西端
 は、SB-1の西辺
 よりもさらに約2.4
 m西へ延びて直行す
 る柵跡(SA-3)
 と接続している。個々
 の柱の掘り方は、今
 回検出した200近い
 柱の中でも最も大型
 で、深く掘られてお
 り、その意味ではこ
 の遺構の重要性を伺



わせるものである。柱の木質部の遺存がSP-30で認められた。それは、当初検出した柱痕よりもやや南西にずれた位置で掘り方の断ち割り調査中の発見である。そのため、現段階では主柱を補助する添え柱的用途を推定しているが、最大径が22cmもある立派なものである。柵の時期については遺物で判るものがないが、SB-1との位置的な規格性が指摘できるため、この建物と同時期のものと理解している。性格についても同様の理由からSB-1の北側を画するためのもものと理解している。

柵跡2 (SA-1)

先のSA-1とSB-1の間で検出したやはり東西方向のものである。この柵跡もSB-1の北辺に約1mの間隔で平行しており、長さは先のSA-1よりも東西に1間ずつ長い5間のものである。個々の柱の掘り方は比較的小型で浅く、SA-1の約1/2程度のものである。SP-24及び35で柱痕が遺存しており共に径約10cmのものである。柵の時期については、これも又、直接的に示す遺物がなく、その点からは不明であるが、SB-1との位置的規格性を考えると、この建物との同時性が指摘できる。またSA-1との関係であるが、両者が併存したとは考えにくく、遺構検出時、SP-24・35は比較的早い時点で確認し得たが、その他の4ヶ所の柱穴については認識し難く、構造がSA-1に比べて簡略的であることから、SA-1に先行する一時的なものではないかと推察している。

柵跡3 (SA-3)

先のSA-1から直角に南へ延びる南北方向の長さ4間の柵跡である。SB-1の西辺とは、2.1~2.4mの間隔でほぼ平行しており、その南端は、SD-14にはほぼ接する位置で、SB-1

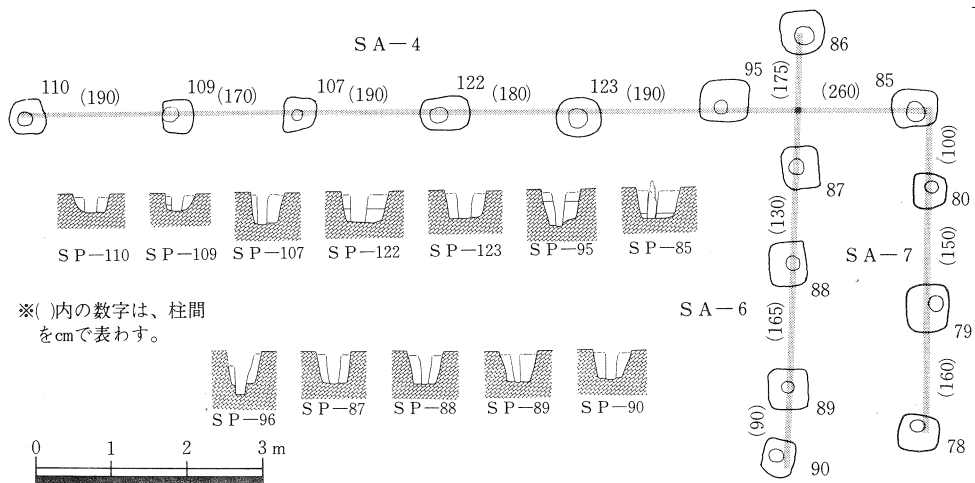


fig.21 SA-4・6・7

の南辺からすると、約1.5mまで検出している。SD-17とは遺構の切り合い関係からSA-3が後出でありSA-3の南端を推定するのに支障はないが、SD-14とは切り合い関係が不明であるため、SP-164が柵の南端であるか判断しかねる。しかし、SD-14より南へは同柵は伸びておらず、SD-14の存続期間が、3回の掘り直しを認めSD-17よりも後出でありかつ長期に及ぶものと推察できることから間接的にはSD-14とある程度の共伴関係にあり、SD-14に接続するか、或は、それに近い状態で終るものと理解している。

柵跡4 (SA-4)

調査区中央南寄りで検出した東西方向の長さ6間以上となる柵跡である。この柵の東端は、SP-85と考えており、SB-2の建物西辺から南へ約3.4m、西へ1.2mの位置になる。ここから柵はSB-7から約2.8m、SB-3から約3.2mの地点をさらに西へ伸びておりその西端は、さらに調査区外へ伸びるものと考えている。途中で、SD-20を横切る形になるが、SP-107の掘り方を見る限りにおいては、SD-20よりも後出であると考えられる。

柵跡5 (SA-5)

調査区東端のSB-2の東側を画するような形で検出した南北方向長さ5間以上の柵跡である。柵の北端はSP-44と考えており、SB-2の北辺と合致する。柵の位置もSB-2とは、約2mの間隔でほぼ平行している。この柵と建物の位置関係は、柵の方向は異なるものの、SA-1とSB-1の関係に相通じるものと考えている。南端は、SP-71までしか検出しておらず、さらに調査区外へと伸びるものと推定される。

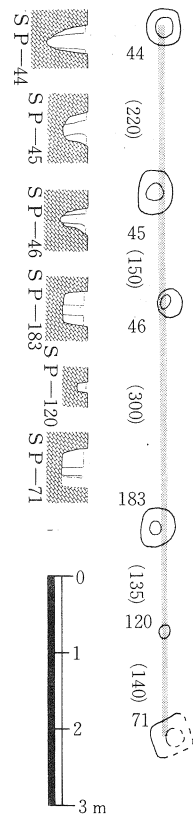


fig.22 SA-5

柵 6 (SA-6)

調査区中央南寄りで検出した南北方向の長さ4間の柵である。先のSA-5とほぼ平行しておりSB-2の建物西辺から南へ2.4mの地点に北端の柱であるSP-56が位置し、約2.4mの間隔である。またSB-3とは、建物の東辺から約6.3mの間隔でこれもまたほぼ平行する様である。柵の南端は、竪穴様建物の北へ約4mに位置するSP-90で終わっている。時期を示す状態での遺物は検出できなかったが、前述したようにその位置状態は、SB-2との関連を示しており、この点から間接的には、求めることができる。

柵 7 (SA-7)

掘立柱建物(SB-2)の南西で検出した南北方向の柱間3間の柵である。北端の柱は、SP-85で、東西方向の柵(SA-4)と共有する。南端の柱はSP-78で、この両端の柱を結ぶ直線の片側に寄って中間の柱を配置している。この点は、同じく南北方向の柵である、SA-3と共通する。

その他のピット

第3遺構面では、180ヶ所を越えるピットを検出している。その大半が何等かの柱跡と推定しており、ここでは一覧表にまとめて報告しておく。

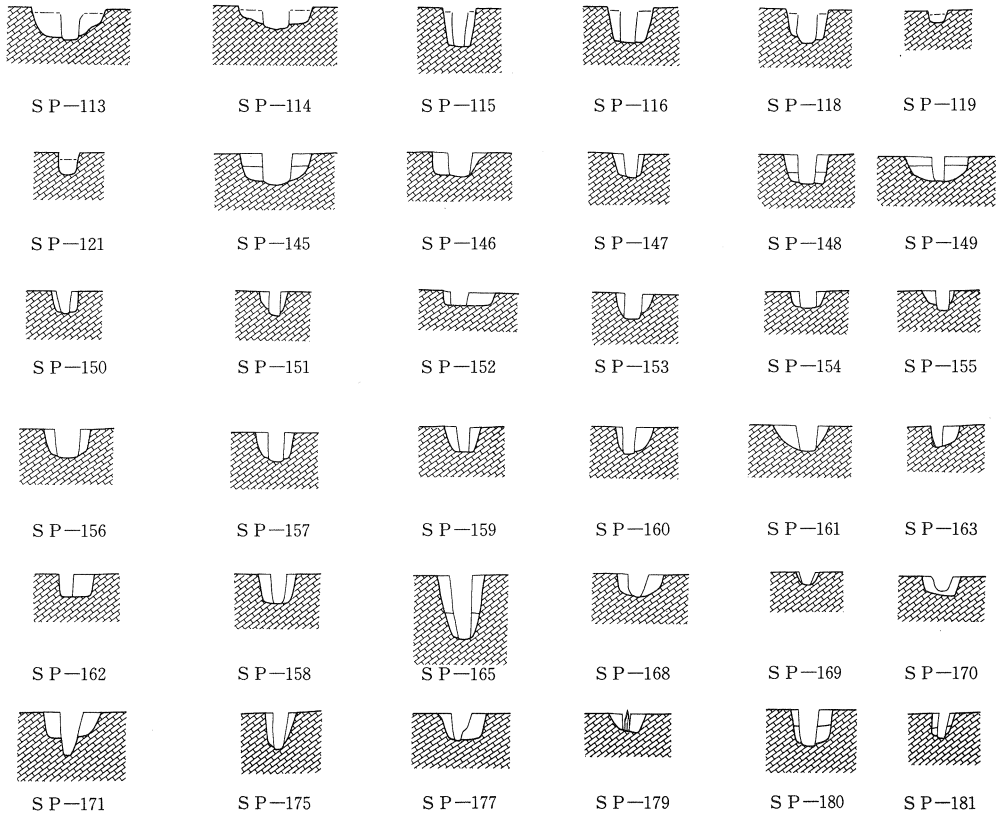


fig. 23 柱穴断面図(1)

縮図1/60 1 m

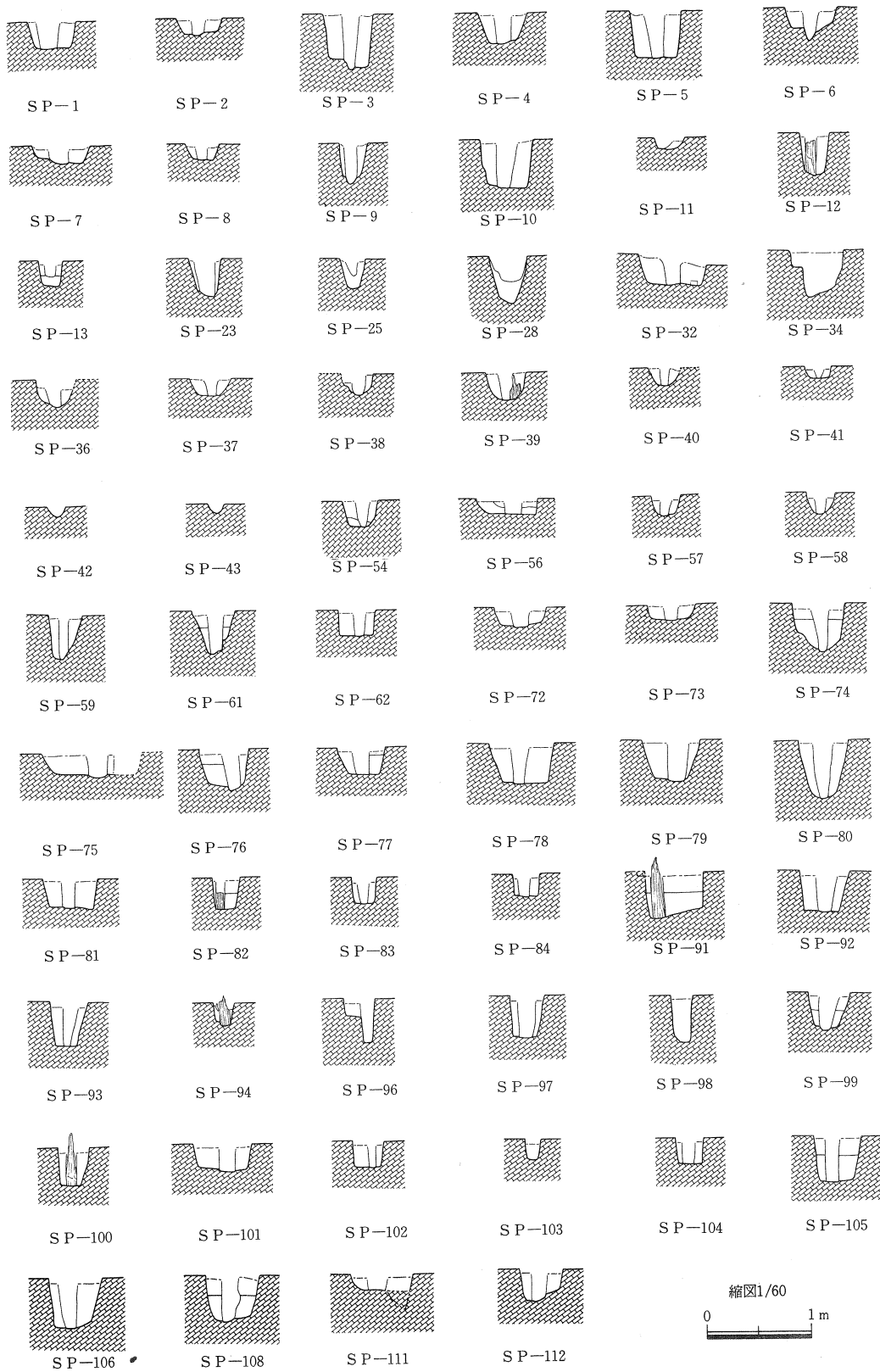


fig. 24 柱穴断面図 (2)

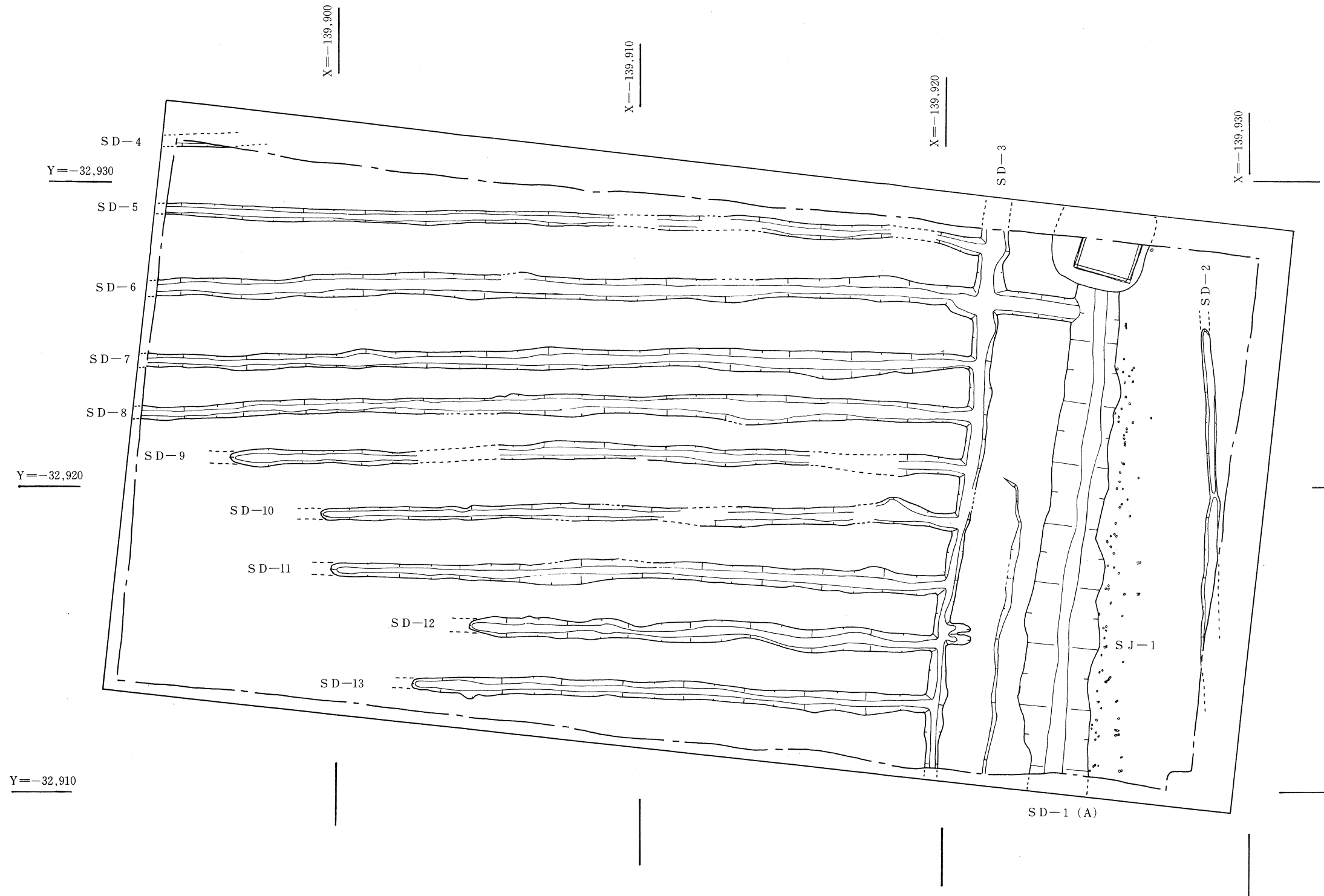


fig. 25 第1遺構面全図

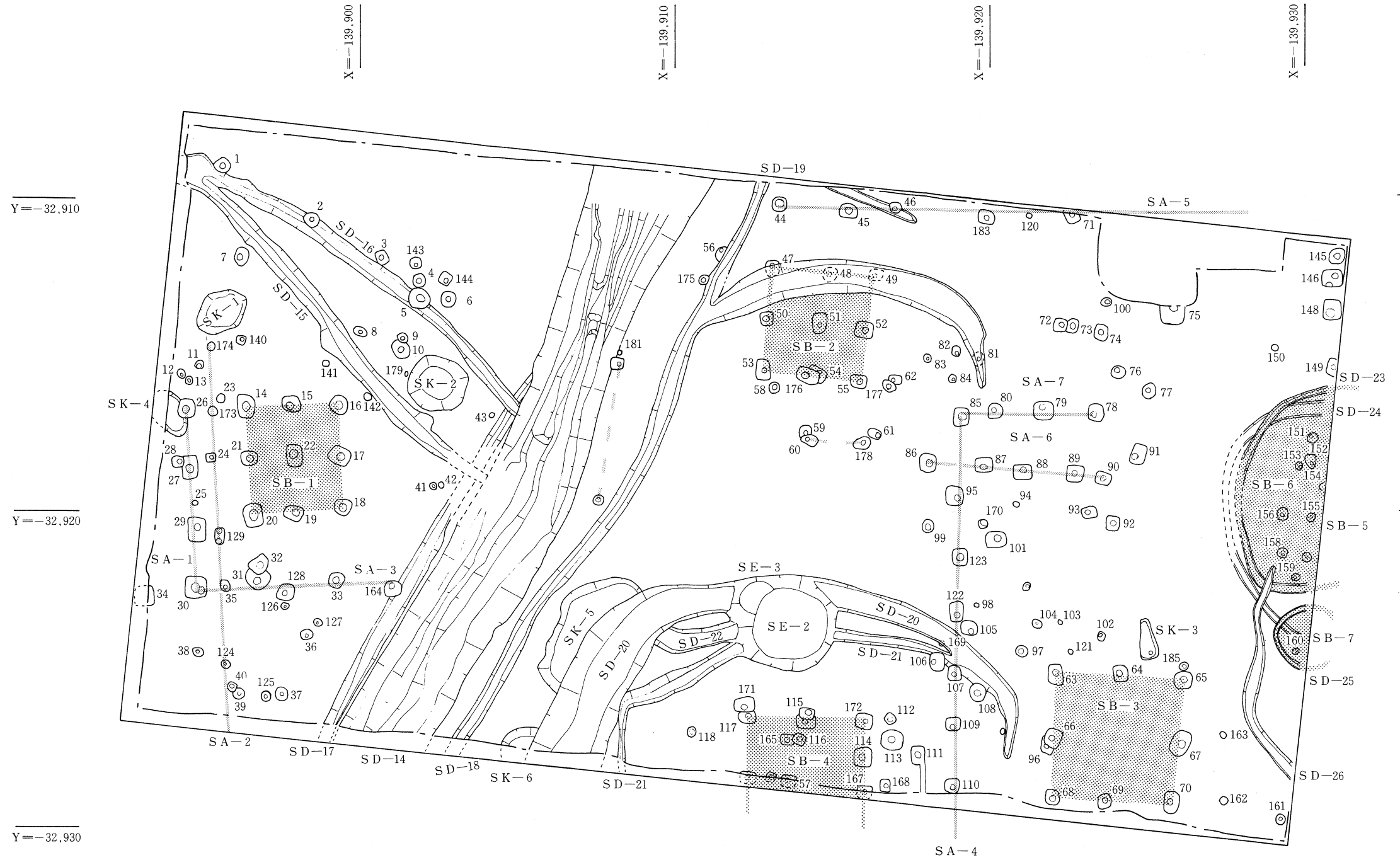


fig.26 第3遺構面(全体)

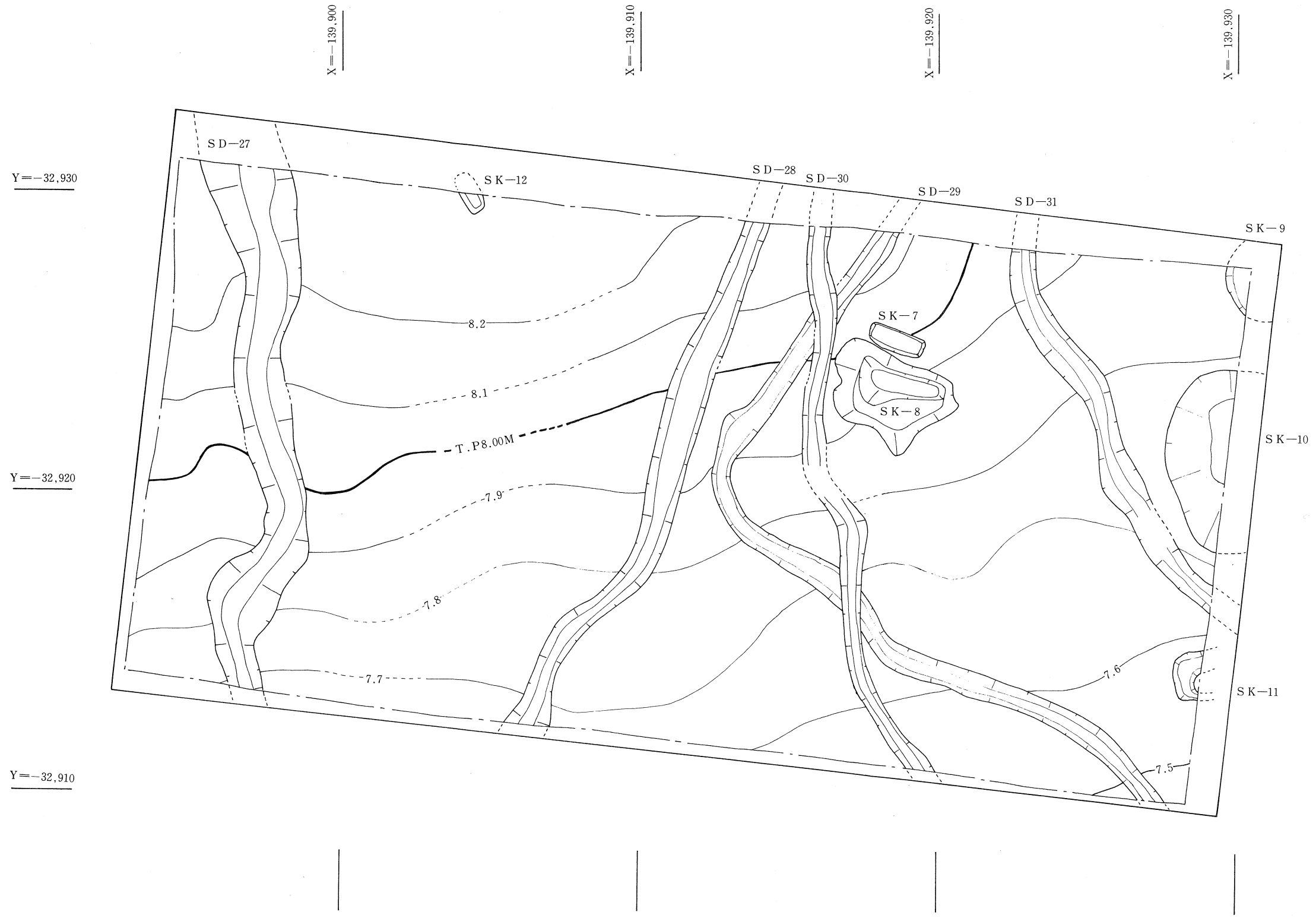


fig. 27 第4遺構面検出遺構及びコンタ

番 号	検出地区	規模(縦×横×深さ) 単位(cm)	柱 根	出土遺物・備考
SP-1	1 区	65 ×50 ×25		土器片
SP-2	1	50 ×50 ×15		
SP-3	1	45 ×40 ×50		土器片 須恵器:坏身片 土器片
SP-4	1	50 ×40 ×25		
SP-5	1	70 ×70 ×45		土器片
SP-6	1	50 ×50 ×30		土器片
SP-7	1	60(長径)×40(短径)×20		土器片
SP-8	1	40(長径)×30(短径)×15		土器片
SP-9	1	40(長径)×30(短径)×40		土器片
SP-10	1	65(長径)×50(短径)×50		土器片
SP-11	1	35(長径)×30(短径)×10		土器片
SP-12	1	40(長径)×30(短径)×35	遺存 20(長さ)×16(長径) 7(短径)	土器片
SP-13	1	25 ×25 ×15		土器片
SP-14	1	75 ×65 ×60		土器片 桃の種
SP-15	1	65(長径)×50(短径)×50		木片 土器片
SP-16	1	60 ×60 ×30		土器片
SP-17	5	70 ×60 ×45		土器片
SP-18	5	55(長径)×50(短径)×45		須恵器:小形甕片 土器片 桃の種
SP-19	5	60 ×50 ×50	遺存 57.6 × (径) 11.2	須恵器:坏身片 土器片
SP-20	5	80 ×60 ×45		土器片
SP-21	5	55(長径)×45(短径)×35		土器片
SP-22	5	70(長径)×50(短径)×50		木片 土器片
SP-23	1	30 ×30 ×35		土器片
SP-24	5	40 ×30 ×35	遺存 44 × 10.4 8.6	須恵器:坏蓋片 韓式系土器(繩 蓆文)片 須恵器・土師器片
SP-25	5	20 ×15 ×30		土師器:小型甕片
SP-26	1	60 ×50 ×45		土器片
SP-27	5	70 ×50 ×55	遺存(添え木)	須恵器:坏身片・埴片・土 器片 桃の種
SP-28	5	40 ×35 ×45		須恵器:坏身片・土器片

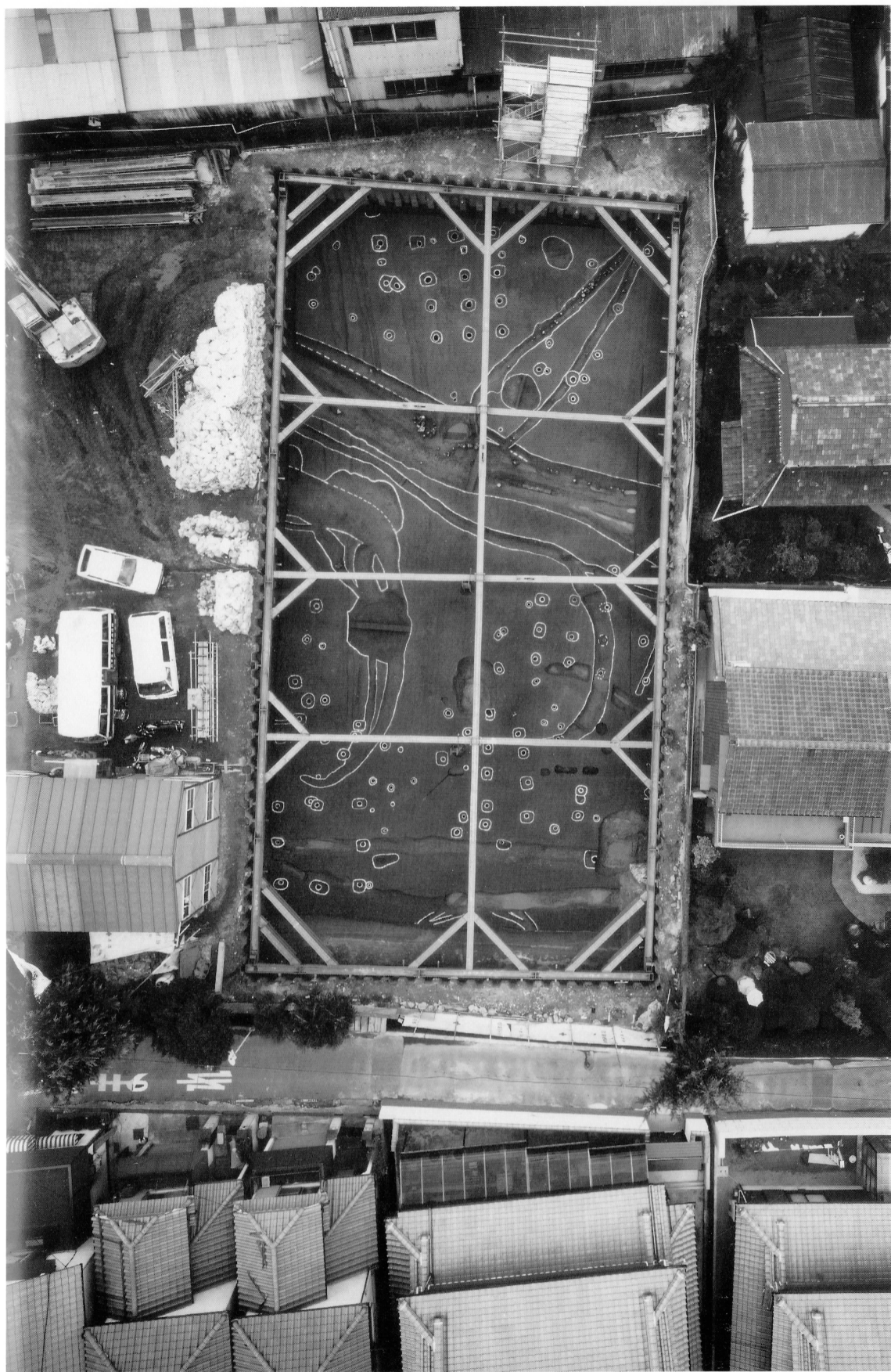
番 号	検出地区	規模(縦×横×深さ) 単位(cm)	柱	根	出土遺物・備 考
S P - 29	5	80 × 55 × 45			須恵器：坏蓋片 須恵器・土師器片
S P - 30	5	70 × 70 × 70	遺存 86	× 21.2 16.4	須恵器：坏蓋片・土師器：高坏片 須恵器・土師器片 桃の種
S P - 31	5	80 (長径) × 50 (短径) × 15			土器片
S P - 32	5	70 (長径) × 65 (短径) × 30			木片 砥石・土器片
S P - 33	5	50 × 50 × 15			
S P - 34	5	70 (長径) × 20 (短径) × 45			土器片
S P - 35	5	40 (長径) × 30 (短径) × 30	遺存 42.2	× 11.4 7.8	
S P - 36	5	40 × 34 × 25			
S P - 37	5	40 × 40 × 15			土器片
S P - 38	5	35 × 30 × 20			土器片
S P - 39	5	40 × 40 × 25	遺存 35	× 11.6 10.2	土器片
S P - 40	5	35 × 30 × 20			土器片
S P - 41	5	25 × 20 × 15			
S P - 42	5	20 × 20 × 10			
S P - 43	2	20 × 20 × 10			
S P - 44	3	50 × 40 × 55			土器片
S P - 45	3	60 (長径) × 50 (短径) × 35			土器片
S P - 46	3	40 (長径) × 30 (短径) × 40			土器片・小型甕片・土器片
S P - 47	3	60 × 50 × 45	遺存 41.6	× 9.6 18.6	須恵器：坏蓋片・土師器片
S P - 48	3	50 × 50 × 40			須恵器：坏蓋片・土器片
S P - 49	3	40 (長径) × 30 (短径) × 35			
S P - 50	3	45 × 40 × 40			
S P - 51	3	70 × 40 × 35			土器片
S P - 52	3	60 × 50 × 30			土器片
S P - 53	3	70 × 40 × 50			土器片
S P - 54	3	60 × 40 × 40			土器片
S P - 55	3	50 × 40 × 45			須恵器：坏蓋片 土器片
S P - 56	3	40 × 30 × 20			

番 号	検出地区	規模(縦×横×深さ) 単位(cm)	柱 根	出土遺物 ・ 備 考
S P - 57	7	50 × 40 × 20		
S P - 58	3	40 × 35 × 20		
S P - 59	3	40 × 30 × 45		
S P - 60	3	60 (長径) × 40 (短径) × 30		
S P - 61	3	40 × 35 × 40		土器片
S P - 62	3	40 × 30 × 25		
S P - 63	8	60 × 50 × 50		木片 土器片
S P - 64	8	50 × 40 × 35		土器片
S P - 65	8	60 × 60 × 45		
S P - 66	8	60 × 50 × 55		土器片
S P - 67	8	90 (長径) × 70 (短径) × 40		土器片
S P - 68	8	50 × 50 × 50		須恵器：坏身片・土器片・土師器： 取手
S P - 69	8	50 × 40 × 55		木片
S P - 70	8	70 (長径) × 50 (短径) × 45	遺存 35.6 × 7.4 6.4	土器片
S P - 71	3	50 × 40 × 35		土師器：高坏片・土器片
S P - 72	3	35 × 30 × 20		
S P - 73	3	50 × 35 × 15		土器片
S P - 74	4	50 × 40 × 45		
S P - 75	4	80 × 60 × 25		土器片
S P - 76	4	50 × 40 × 40		
S P - 77	4	50 × 40 × 25		木片・土器片
S P - 78	4	50 × 50 × 40		
S P - 79	3	60 × 60 × 40		
S P - 80	4	45 × 45 × 55		
S P - 81	3	40 × 40 × 25		土器片
S P - 82	3	30 × 30 × 30	遺存 20 × 11 8	土器片
S P - 83	3	30 × 30 × 25		
S P - 84	3	30 × 20 × 20		
S P - 85	3	60 × 50 × 40	遺存 44 × 7.6 5.2	土器片

番 号	検出地区	規模(縦×横×深さ) 単位(cm)			柱 根	出土遺物 ・ 備 考
S P - 86	3	60	×60	×55		土器片
S P - 87	3	60	×50	×40		
S P - 88	3	60	×50	×45		
S P - 89	4	60	×50	×40		土器片
S P - 90	4	50	×40	×40		土器片
S P - 91	4	70	×50	×45	遺存 62.4 × 8.8 6.2	土器片
S P - 92	8	50	×40	×40		土器片
S P - 93	8	45	×35	×45		土器片
S P - 94	7	20	×20	×35	遺存 24.4 × 6.8 6.4	土器片
S P - 95	7	65	×50	×50		土器片
S P - 96	7	50	×40	×50		
S P - 97	7	40	×40	×40		
S P - 98	7	15	×10	×45		
S P - 99	7	40	×40	×35		
S P - 100	4	35	×30	×35	遺存 52 × 9 6.2	土器片
S P - 101	7	60	×50	×25		
S P - 102	8	30	×30	×25		木片
S P - 103	8	10	×15	×20		
S P - 104	7	30	×30	×25		
S P - 105	7	60 (長径) × 50 (短径) × 45				
S P - 106	7	60	×50	×50		土器片
S P - 107	7	40	×40	×45		土器片
S P - 108	7	60	×50	×45		土器片
S P - 109	7	40	×40	×25		
S P - 110	7	45	×45	×25		土器片 桃の種
S P - 111	7	60	×40	×15		
S P - 112	7	40	×40	×20		土器片 桃の種
S P - 113	7	70	×60	×25		
S P - 114	7	60	×60	×20		
S P - 115	7	50	×35	×30		土器片

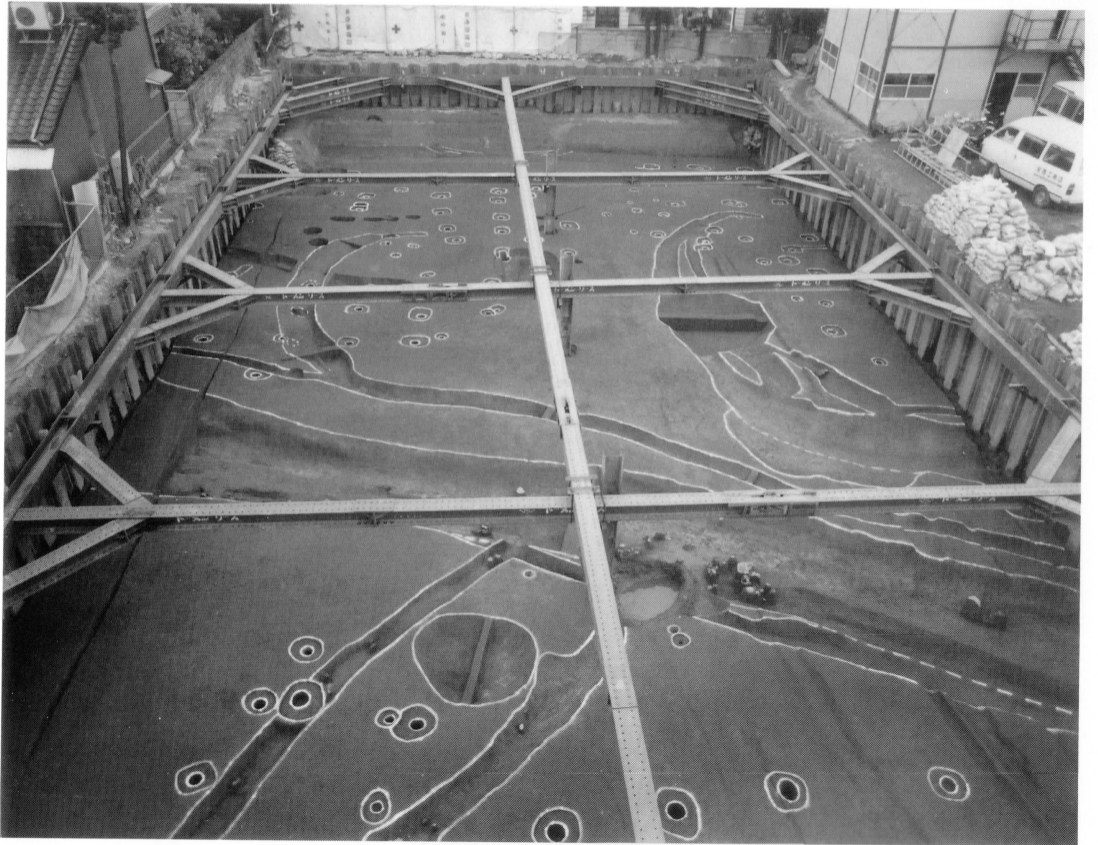
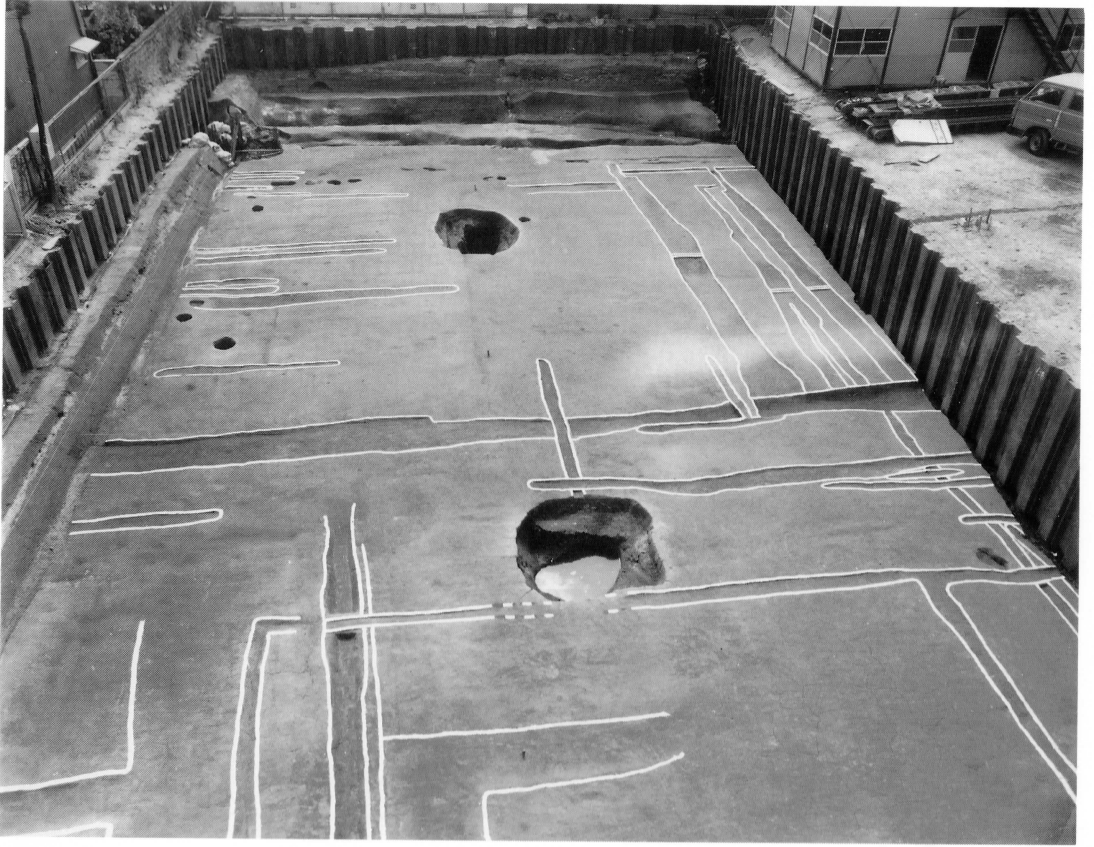
番 号	検出地区	規模(縦×横×深さ) 単位(cm)	柱 根	出土遺物・備 考
S P - 116	7	40 × 30 × 30		土器片
S P - 117	7	60 × 40 × 60		
S P - 118	6	30 × 30 × 30		
S P - 119	7	20 × 20 × 10		
S P - 120	3	20 × 15 × 15		土器片
S P - 121	8	20 × 20 × 20		
S P - 122	7	60 × 40 × 40		土器片
S P - 123	7	60 × 50 × 40		土器片
S P - 124	5	30 × 30 × 40		
S P - 125	5	35 (長径) × 30 (短径) × 20		土器片
S P - 126	5	25 × 20 × 15		須恵器：坏身片・須恵器・土師器片
S P - 127	5	25 × 25 × 20		土器片
S P - 128	5	50 × 50 × 25		須恵器：坏身片・土器片
S P - 129	5	55 (長径) × 30 (短径) × 44		土器片
S P - 140	1	35 × 30 × 40		
S P - 141	1	20 × 20 × 30		
S P - 142	1	30 (長径) × 20 (短径) × 25		
S P - 143	1	40 × 40 × 35		
S P - 144	1	40 × 40 × 40		
S P - 145	4	50 × 50 × 25		土器片
S P - 146	4	70 × 60 × 20		
S P - 147	7	30 × 30 × 20		
S P - 148	4	70 × 60 × 25		
S P - 149	4	50 × 50 × 20		
S P - 150	4	20 × 20 × 20		
S P - 151	4	40 × 30 × 20		須恵器：坏身片・土器片
S P - 152	4	40 (長径) × 30 (短径) × 10		
S P - 153	4	20 × 20 × 20		
S P - 154	4	25 × 25 × 15		

番 号	検出地区	規模(縦×横×深さ) 単位(cm)	柱 根	出土遺物 ・ 備 考
S P - 155	8	30 × 30 × 15		
S P - 156	8	40 × 30 × 25		
S P - 157	8	30 × 30 × 25		
S P - 158	8	35 × 30 × 25		
S P - 159	8	30 × 25 × 20		
S P - 160	8	20 × 20 × 20		
S P - 161	8	30 × 30 × 20		
S P - 162	8	30 × 20 × 20		
S P - 163	8	20 × 20 × 20		土器片
S P - 164	6	50 × 50 × 60		土器片
S P - 165	7	50 × 40 × 50		
S P - 166	7	50 × 35 ×		土器片
S P - 167	7	50 × 40 ×		土器片
S P - 168	8	40 × 30 × 20		土器片
S P - 169	7	20 × 20 × 10		
S P - 170	7	30 × 30 × 10		
S P - 171	7	60 × 45 × 35		土器片
S P - 172	7	60 × 50 × 50		
S P - 173	1	30 × 30 × 40		
S P - 174	1	30 × 25 × 40		
S P - 175	2	30 × 30 × 30		土器片
S P - 176	3	80 (長径) × 50 (短径) × 25		
S P - 177	3	50 (長径) × 30 (短径) × 20		土器片
S P - 178	3	60 (長径) × 40 (短径) × 25		
S P - 179	1	10 × 10 × 15		土器片
S P - 180	2	40 × 40 × 30		土器片
S P - 181	2	20 × 20 × 20		
S P - 182	7	60 × 40 ×		
S P - 183	3	50 × 40		
S P - 184	6	30 × 30		

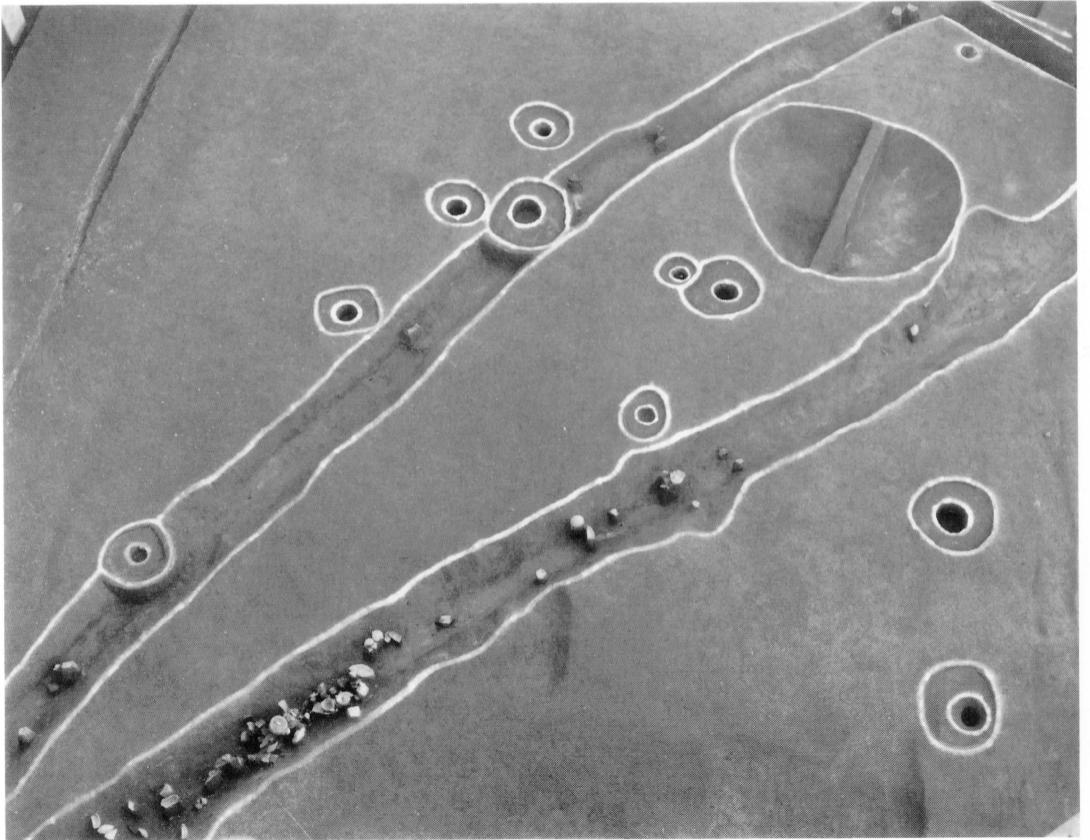


図版二 中野遺跡第四遺構面（全景）





図版四 大形溝(SD一四)・中形溝(SD一五・一六)

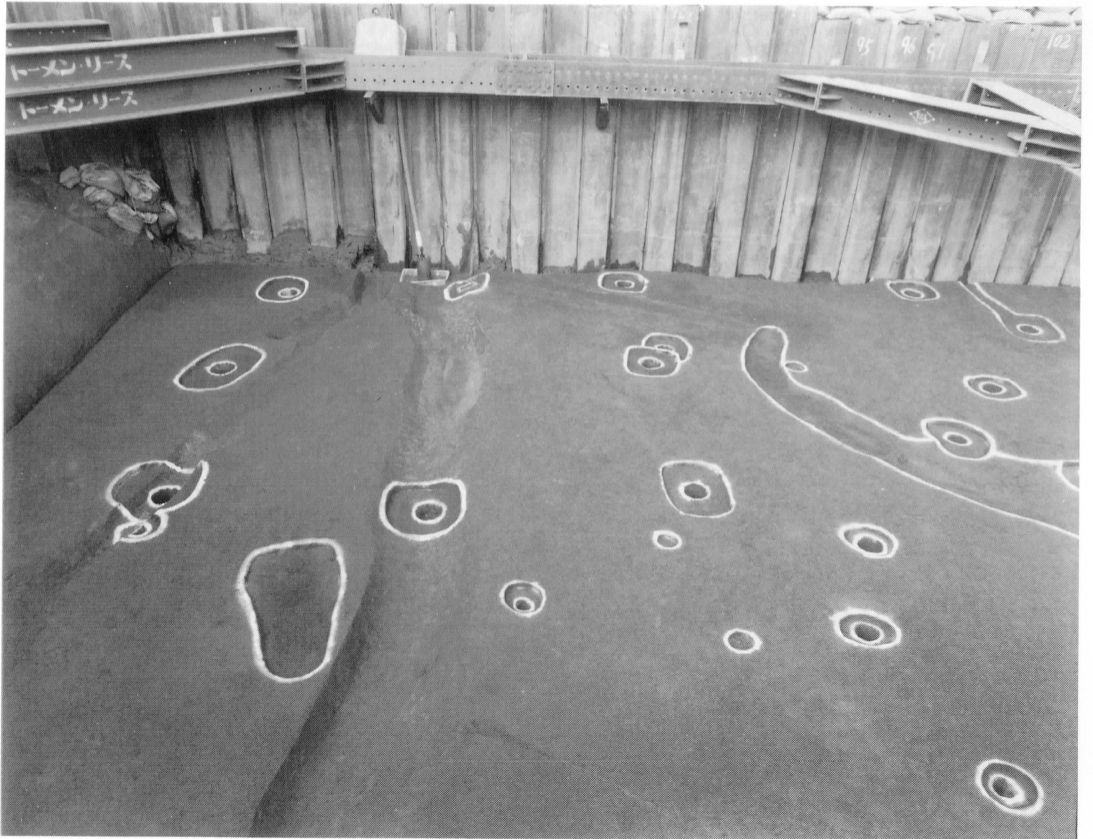
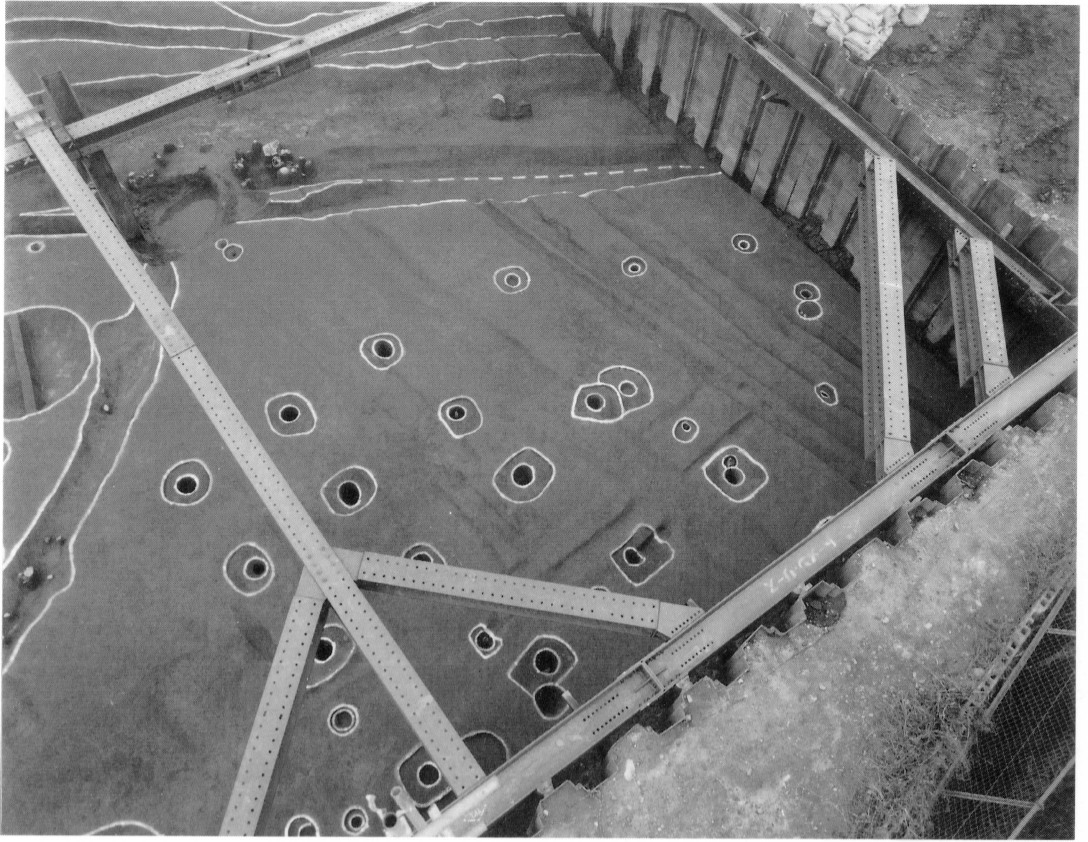


図版五 大形溝(SD一四) 樋検出状況



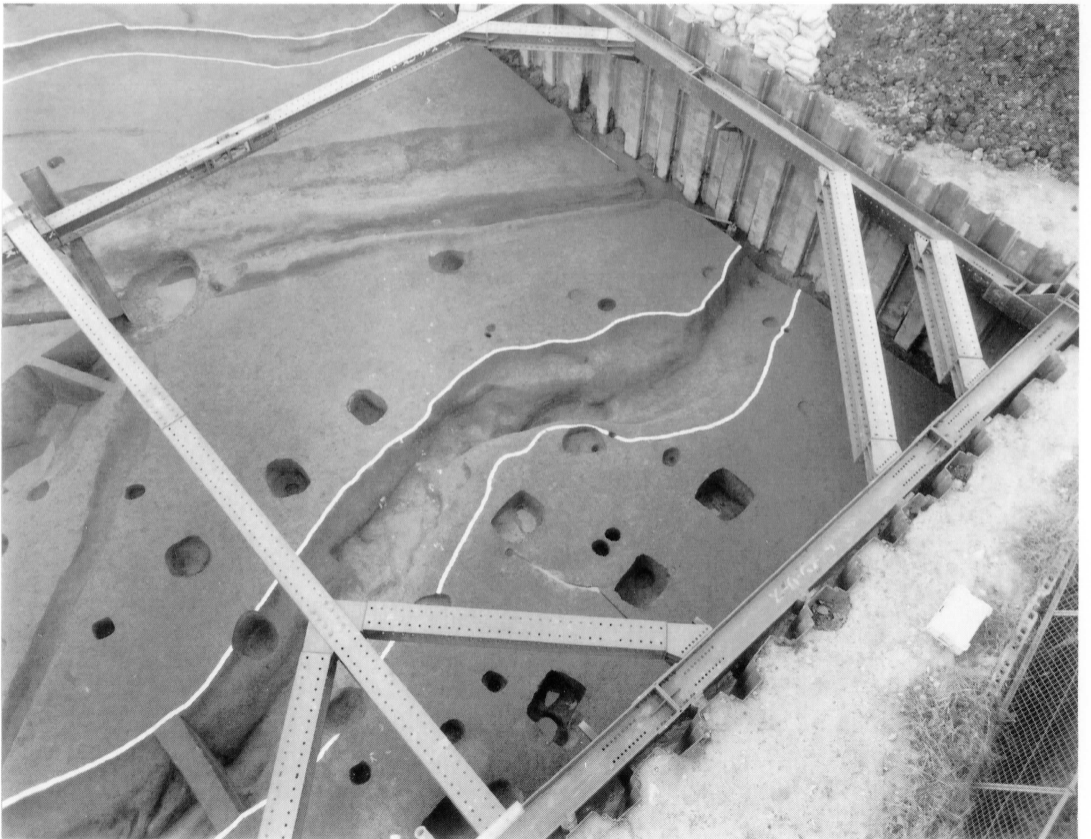
図版六 井戸（SE―二）・鳥形木製品出土状況

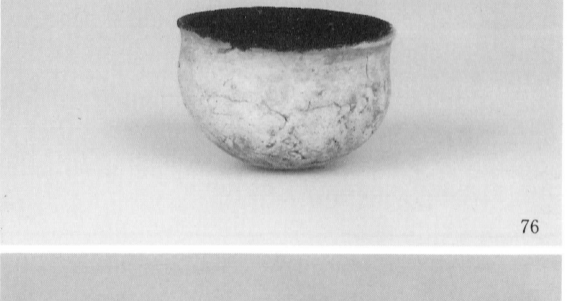
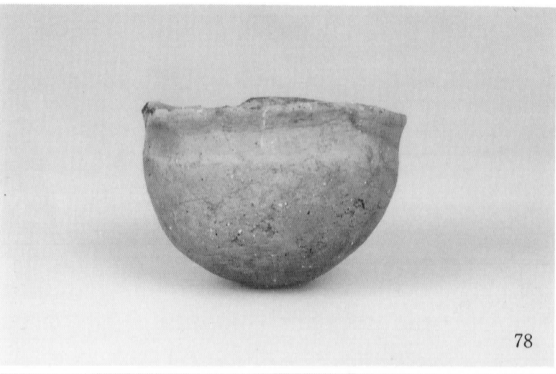
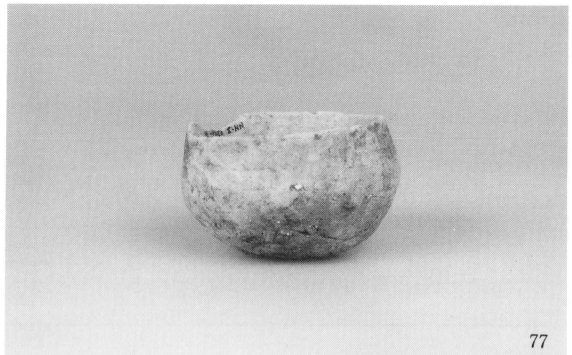
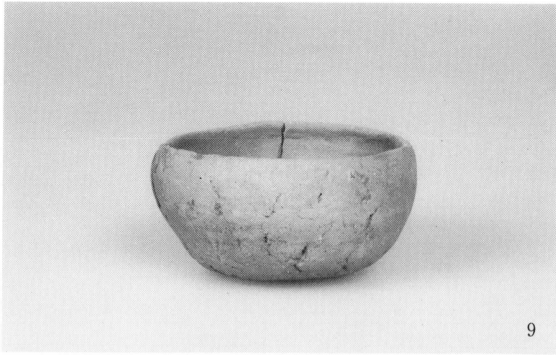


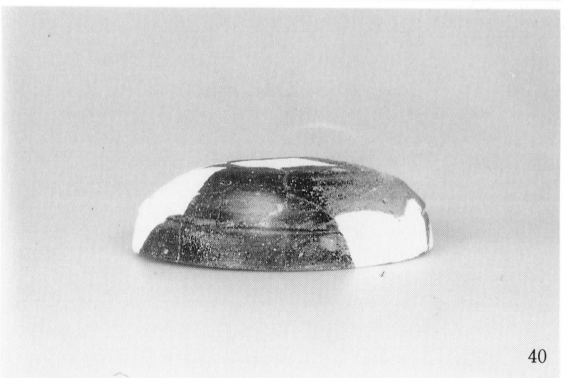
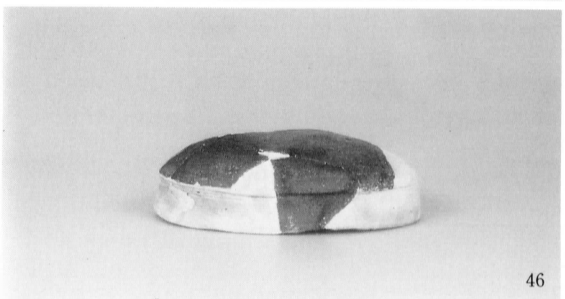


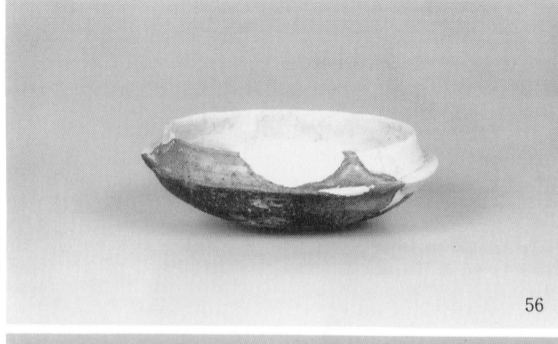
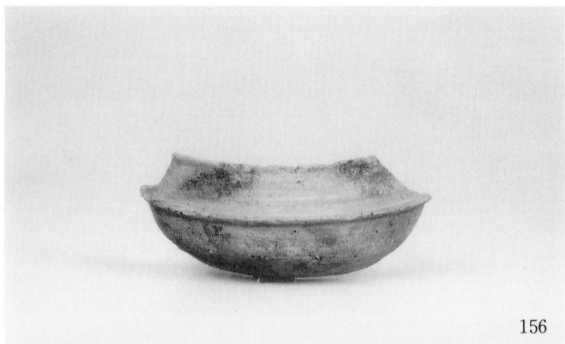
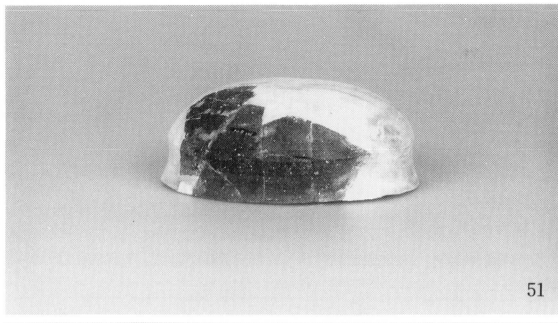
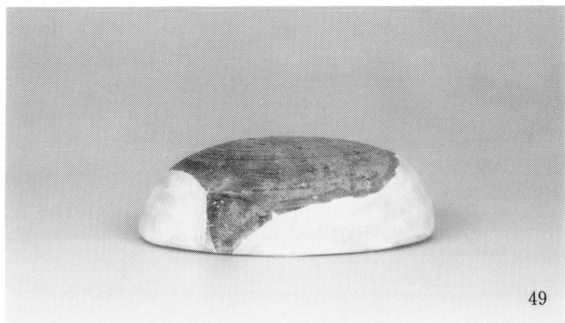
図版八 掘立柱建物 (S B | 5・6・7) ・柵跡 (S A | 2)

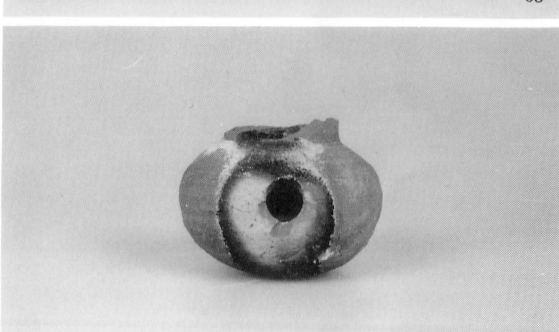
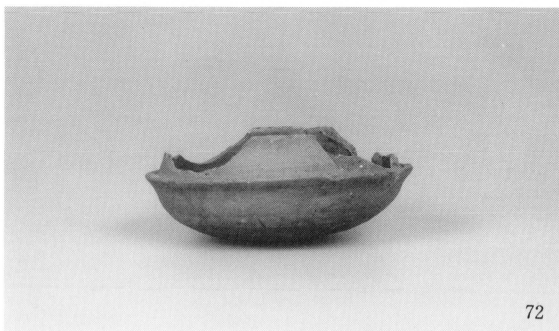
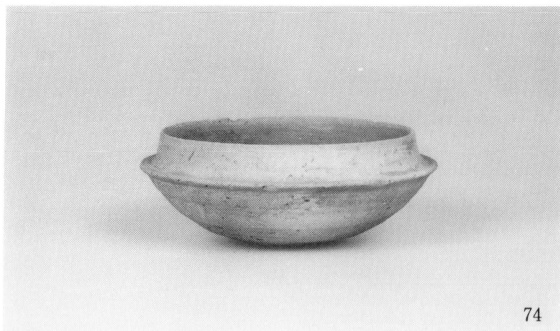


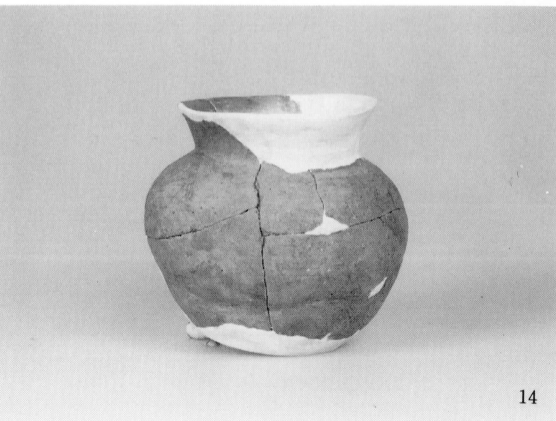
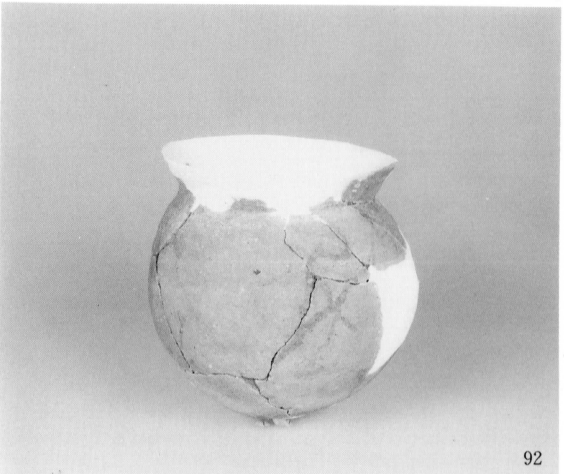


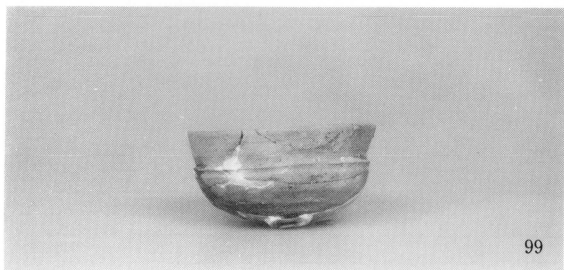












99



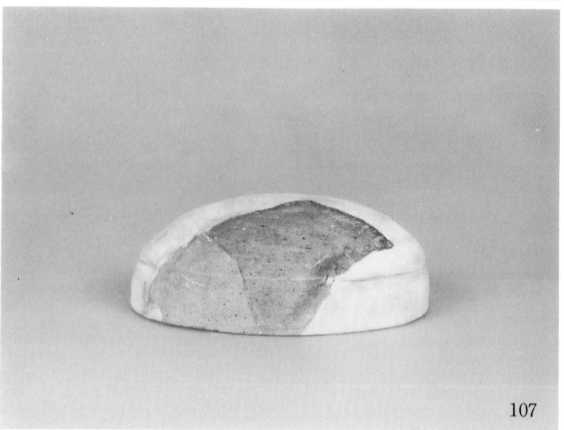
108



106



105



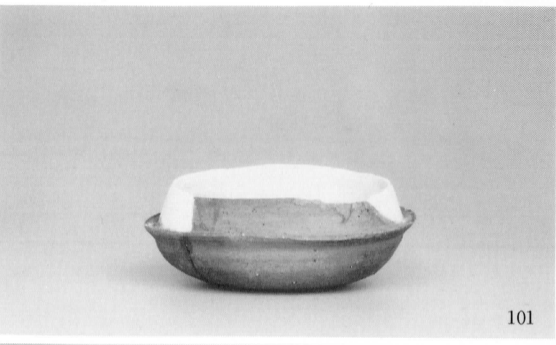
107



104



102



101



103



100